万象　平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
令和六年七月一日発行（毎月一回一日発行）
第二十三巻　第四号（通巻二六八号）

万象

BANSYO

七月号

2024. 7

七月の句

触るるべきものにはあらず黒揚羽

飛高隆夫

揚羽蝶は古来、日本に生息し、その翅は広げると10センチを越えます。掲句の黒揚羽は、光沢を放つ黒い地色で、その飛来する姿は優美で躍動感があります。

飛高氏は、ご自宅の庭に現れた黒揚羽の気品ある姿に触れてみたい衝動に駆られたに違いありません。けれど、「いや、触れてはいけない」と思い、「触るるべきものにはあらず」との措辞に至ったのでしょう。

きっと、神秘的な黒揚羽を神聖視されたのではないでしょうか。昆虫をこよなく愛した飛高氏の心優しい一句です。

（句集『川あかり』所収）

（本多ひとみ）

万象

BANSYO

令和六年
七月号

噴水にたつ虹ほどの淡さにて
人の心に棲みたし死後は

長尾幹也（歌人）

万　象

令和6年7月号

名誉主宰作品　田水引く……内海　良太　4
主宰作品　葉桜の風……江見　悦子　5
風音集Ⅰ・Ⅱ……小林　愛子／中村　千久・福島せいぎ・柳澤　宗正・曽根　満／松原智津子・亀田やす子・沢辺たけし・吉中　愛子／榎本　文代・神田美穂子・井村　和子・前田貴美子　6
万象の窓㉘　荘川桜……江見　悦子　10
同人作品　江見悦子　選……11
同人会だより　幹事会報告……大久保　進　31
5月の「万象」オンライン同人句会高点句……32
珈琲ぶれいく㊿……33
同人作品の佳句……江見　悦子　34
同人特別作品
鷹……西本　才子　36
桜人……砂地　宏子　37
特別作品評（五月号）……下嶽　孝一　38

同人作品鑑賞（五月号）……中本　清　39
続・風のしをり⑦　子規の俳句鑑賞（三）　林　徹……編集部　40
万葉の抒情⑬『万葉集』にたずねる抒情の源流⑬……橋本　清　41
万象ノオト「動物園」……荻野加澄子・小板橋泰山・望月　敏男
竹重　富子・鶴田　智美・為永香月枝　42
江見悦子自選句鑑賞⑩　宙泳ぐ瓜の巻きひげ沖縄忌……柳澤　宗正　44
土用照り墨塗られたる多喜二の書……岡本　敬子　44

万象作品　江見悦子・内海良太　共選……45

俳句カレンダー掲載句自註〈潮騒のただ聞こえをり昼寝覚〉……中村　千久　55
万象作品の佳句……内海　良太　56
新中央句会報（4月例会）……58
北から南から　俳句鑑賞時の五感活用（東京）……安藤美酒々　62
ルビーの小函（七月号）……編集部・校正担当　63
東西南北……64

〈表紙イラスト〉永井もりいち

田水引く

内海良太
（名誉主宰）

田水引く藁屑どつと押流し

永き日や一人蓮田を鋤返す

甘茶仏指の先より乾きけり

中華街春風赤く通りけり

深深と息してゐたる朝桜

万年も生きとうないと亀鳴けり

葉桜や調教了へし馬の湯気

葉桜の風

江見悦子（主宰）

噴湯の煙のうねり芽吹山

内濠を半分狭め青みどろ　皇居東御苑　三句

上皇の金明竹の皮脱げり

二の丸の池につんつん河骨黄

きざはしを上る大蟻荒行堂　中山法華経寺　三句

竜神の池にかるの子こぼれ落つ

葉桜の下葉桜の風湧けり

定家葛

小林愛子
（名誉顧問）

遠火事のサイレン走る桜冷え

チューリップ垂直の茎残りけり

十二単日向日陰のむらさきに

コルセット弛みてきたる蝶の昼

蠅生れすかさず我に疎まるる

うぐひすの夕啼きを聴き風を聴き

定家葛の咲きかぶさりし華髪かな

万華鏡

中村千久（編集人）

リラ冷えの薄むらさきの暮色かな
ボンボンの銀の小函や聖五月
ブロンズの裸婦像に降る夏落葉
金文字の徳必有鄰花は葉に（中山法華経寺蒋介石胸像）
初夏や僧の桐下駄前のめり
万緑の森のゆらぐや万華鏡

観潮船

福島せいぎ（顧問）

母の忌は春の筍づくしかな
国生みの島へ傾く観潮船
手を打てばおたまじやくしの泳ぎだす
曳売りの女が捌く桜鯛
ふるさとや囲鮎売るなんでも屋
野遊や作務衣ひらりと脱ぎ捨てて

若葉雨

柳澤宗正（顧問）

湾岸に走る白波五月来ぬ
茗荷汁夏日予報の朝の卓
一山の風にさやぐや竹の秋
空席の目に付く講座若葉雨
若葉風背筋伸して馬上の子
青嵐古物市を吹き抜くる

大暑

曽根満（同人会会長）

竈火の猛りてゐたり半夏雨
水無月や富士を近きに峠越ゆ
中天の日に蒸されたる田草取
土煙たてて大暑の雀どち
ほうたるや水の匂へる森の闇
蓮始めて開く沼の細波に

初夏の旅

松原智津子（北海道）

子と巡る祖の地芳し初夏の旅
白鷺や上り下りの錦帯橋
五月晴津和野のランチ埋め飯
夏日影松下村塾学びの道
萩城跡白藤一枝残るのみ

ハンカチの花

亀田やす子（栃木）

親すずめ孔雀の餌を散しけり
青空にハンカチの花溶けやすし
芍薬の芯に小蟻の這入り込む
引き抜きしどくだみ嶺根ちぎれゐて
旅客船かなたに安房の海鵜飛ぶ

立夏

沢辺たけし（千葉）

縁切りの土器砕き冴返る
亀鳴くや救命浮輪池に無く
スニーカーの跡を古草押し上ぐる
竹林の幹の青さに余寒なほ
鯉の影大地に躍る立夏かな

五月来る

吉中愛子（東京）

花芯より足長蜂の脚あまり
竹の子の皮はぐ皮に埋れて
傘上げて下げて行き交ふ菖蒲園
五月来る人見送りて出迎へて
母衣錆し熊谷草にばかり風

カーネーション

榎本文代（神奈川）

花冷えや削りきし歯の嚙み合はず
瓦斯タンクに螺旋階段鳥雲に
庭下駄の鼻緒のゆるみ朧月
夏来るマチスの赤ゴッホの黄
一本は遺影の母へカーネーション

てふてふ

神田美穂子（静岡）

てふてふの一筆書きの行方かな
クローバに影ふはふはと赤子の歩
つちふるや机上に地球の歩き方
麦秋や川は蛇行をくり返し
校庭の声跳ね返る五月かな

薔薇園

井村和子（石川）

薔薇園に一年生の赤帽子
師の句碑へ十歩春濤交響す
杏咲く築地の奥に友禅師
馬の背に黄沙降りつぐ都井岬
青嵐番号で呼ぶ岬馬

仮枕

前田貴美子（沖縄）

受水（ウキンジュ）の水鳴る清明曇りかな
拝所石に春の蝿寄る親しさよ
降臨（ヤハラツカサ）の浜の差し潮鳥雲に　浜川御嶽　二句
うりずんの波音神の仮枕
雪加鳴く御嶽（ウタキ）野面の常（とこ）湿り

万象の窓㉘

荘川桜

江見悦子

今年の東京の染井吉野の開花は、例年より遅れて3月29日、靖国神社の標本木の前の発表が待ち遠しかった。一斉に開く染井吉野の美しさが好きで、筆者も、自宅近くを流れる神田川、井の頭公園、千鳥ヶ淵と、首都圏を離れずに楽しんだのだったが、偶然由緒のある一本桜に出会った。

東京多摩の町田市に出掛けた時「荘川桜」と書かれた一枚のプレートに目が留まった。説明によれば、御母衣ダム建設に伴って湖底に沈む運命にあった、樹齢400年余のアズマヒガンの実生から育ったもので、水上勉が小説『櫻守』（新潮文庫）の中で取り上げているとあった。道の横の斜め地に枝を拡げていたこの木は、残念な事にすっかり散ったあとで、花びらも草に紛れて見ることはかなわなかったが、どんないきさつでこの地にやって来たのか、興味が募った。

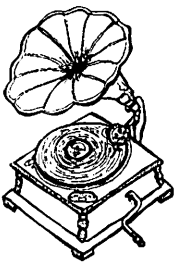
『櫻守』を読みネットを検索し、市や（株）Jーパワーの広報部から情報を得ることが出来た。

昭和27年、戦後の経済復興の真っただ中、電力不足解消に向けて御母衣ダム建設基本計画が告示され、庄川上流の6つの集落360戸、小中学校、神社、寺院、耕地が水底に沈むことになった。荘川村では「御母衣ダム絶対反対期成同盟死守会」を組織し、（株）電源開発（現在のJーパワー）と交渉する中、32年には本工事が始まった。

34年には一応の合意を得て会は解散したが、（株）電源開発初代総裁が村の光輪寺の桜の巨木を目にしたことから、近くの昭蓮寺の桜と共に2本の老桜を移植することになった。掘り起こし、枝を切り落とし、根を縮め、丸坊主になった40トン近い老木の移植である。前代未聞の難工事は、桜博士の指揮の下、クレーンで鋼鉄のそりに乗せ、ブルドーザーで引き上げ、コロの上を600m移動するという、40日間に及ぶ冬の突貫工事となった。

翌年、奇跡的に花をつけ、その木の種から育てられた実生桜は、全国の小中学校等に寄贈され、町田市のこの桜も発電所関係の人の手によって平成11年に植えられたのだった。平安の昔から桜を愛して来た私たち日本民族の心を思う時、記憶にとどめておきたい話となった。

同人作品



江見悦子選

○は佳句に選ばれました。

札幌　岡本敬子

○木の根明く窪みに生る風の渦
鬱屈のかたまりに似て残る雪
いのち伸びますと添がき蕗みそ来
嫩草や降り立つ街の駅のうら
知らぬ人と春光分つ木のベンチ

札幌　林陽子

声変りの少年大志を語る春
雪吊を解かれ黒松悠悠と
里山の水を滲ませ蕗の薹
旅程なき一日珊瑚の島のどか
琉球の日永白砂深く踏み

札幌　落合裕子

投入れの桜満開ショーウィンドー
まだ小さし朽葉の間の菫草
栗鼠登る春楡の幹あたたかし
清明や子象の産毛日に透くる
青空に烟る白さや北辛夷

札幌　濵谷和代

山間の池塘の碧さ春近し

北窓にまづ朝日差す春隣
北辛夷真綿のごとき蕾かな
公園に子の声戻るつくしんぼ
コンテナ船行き交ふ海峡風光る

札幌　大内和憲

身も心もさそふ微光や初桜
手が鳥となり疾走す新人生
早蕨の水に浮くもの沈むもの
きつぱりと手術衣脱ぎて青き踏む
隣人の逝きて目に沁む春の雨

札幌　紅露恵子

さきがけの庭一面のクロッカス
さみどりの並ぶ明るさふきのたう
枝先をやはらかく染め春夕焼
白鳥帰る湖のひかりに集ひつつ
告天子点となるまで昇りつめ

札幌　大内マキ子

親の貌うつして大き仔馬の目
○馬の背を磨いてをりぬ花曇
埴輪の目春の闇よりなほ暗し
下萌や丘にほこほこ土竜穴
海鳴りを詩のごと聞くおぼろ月

札幌　中鉢弘一

流氷の離るる間際エメラルド
引鴨のビルを揺して水面発つ
白樺の木肌の眩し木の芽晴
ケーキ屋の開店を待つ窓に蝶
草若葉小羊背負ふ牧夫像

札幌　北浦詩子

週末の書店賑はふ三月尽
踏み締むる土の感触雪解道
のどけしやベビーシューズの音軽き
冴返る動かぬ雲の鉛色
春塵にまじる木の香や上棟式

江別　佐藤哲

郭公の一声村を動かして
結氷湖断つ鋸の音や風泣ける
春錬空き箱でんと積まれたる
遠郭公ダム湖を越えて聞えくる
冬囲とりて海鳴り近づけり

江別　太田佳美

退官の師に大束のフリージア
蜂蜜の垂るる速さや春深む
投入れの山茱萸灯す大講堂
麗かや空も洞爺湖も縹色
うららけし出雲大社の婚の列

新潟　髙橋ひろ

猫叱る声柔かやあらせいとう
蟻穴を出て人間の領域へ
筍を茹でる天井迄の湯気
筍の湯気出す窓の半開き
音階の外れしラルゴ黄水仙

新潟　髙野松風

春浅し壁に古りたる熊の皮
飯豊嶺の裾濃模様や春の土
○遠目にも大手振りたる春の土手
ひと枝はひらき初めたり花杏
いつせいに鳩下り来り畦青む

南魚沼　森山暁湖

さきがけて中州の柳芽吹きけり
うららけし一輛電車河渡る
春の鳶被災の能登の見ゆるかへ
春炬燵脚より眠くなりにけり
屋敷畑畔といふ畔黄水仙

益子　光岡れい子

畦川の泥巻きあぐる蝌蚪の群れ
倒木に亀と押し合ふ春の鴨
野地蔵の前垂れふはり木の芽風
○箸休めの野蒜酢味噌に止まぬ箸
雨止みて母の忌修す初桜

芳賀　大村かし子

目の合ひし巣鳥すぐさま羽広ぐ
朝戸風リビングの前落椿
園児バス待つ農道に木の芽風
山間の切り岸つつむ山桜
朝食の箸の休まぬ花菜漬

宇都宮　阿久津勝利

鳥雲に入る電工の命綱
幼児の家鴨の如雨露チューリップ
スキップや靴を両手に春の浜

無住寺の魚板の凹み花の冷え

○蓬摘むデイサービスの車停め

栃木　上岡佳子

雨上る残雪の那須山目前に

長堤の養生の芝青みたる

声ぴたと止みし雲雀の行方かな

咲き満ちて風受け止むる桜かな

何処まで花の雲行く思川

佐野　増田幸子

切れ間なく傘打つ音や芽吹山

花楸迫り出す雨の無縫塔

貝母一輪烟雨となれる札所寺

養花天土の湿りを鳩散し

空あをし水辺を飛花の舞ひ上る

佐野　加藤季代

出会ひたる犬嗅ぎ合うて花の山

風出でて寧らかならず夕桜

筍掘る止めの鍬の手に応ふ

紫木蓮寝釈迦のやうな雲ひとつ

一吹きに百の珠散るしやぼん玉

佐野　阿部澄

天ぷらは星の形に蕗の薹

山門に一息つくや匂鳥

さざ波の果つる沼尻葦の角

翡翠の子弾みをつけて翔ちにけり

回廊に浅沓の音夕桜

佐野　芝宮留美子

白鳥守の小屋閉ざさるる彼岸かな

末黒野にゆるき起伏や風渡る

満開の桜堤に子を抱いて

ヒジャブ巻く外つ国の人桜東風

飛花落花いつしか堤午後の日に

佐野　島田和枝

囀や天満宮の朝の杜

夕さりの堤菜の花明りかな

鶴頸に貝母一花の茶席かな

花筵歩き初めたる子の笑窪

麦青む那須連山の晴ればれと

佐野　売野緑

大試験終へてピアノをたたきをり

レイとドレス柩に入るる花の雨

初燕かつて朝市ありし辻

小綬鶏や罅の露れゆく思川

あさぼらけ畑の雉子に起さるる

佐野　店網洋子

○オール担ぐ女子高生や木の芽晴

山ざくら少年野球の声響く

蘆若葉巣塔の鸛の羽搏ける

花の昼インターホンをもう一度

幼子の一歩に尻餅春の芝

足利　大木茂

橘が家系の始め初桜

舟盛りの春の地魚風荒るる

画眉鳥の囀谷戸に日もすがら

谷深き一目千本桜どき

馬鈴薯の発芽の地割れ其処此処に

土浦　澤照枝

鶯の声のころがる山路かな

蛤の身のふつくらと大皿に

小綬鶏の声の高なる雑木山

をどり喰ひしらをいつきに流し込む

蓮植うる頭上を過る常磐線

加須　茂木弘子

春の雨お不動様の手の窪に

三椏の花や地蔵に願ひごと

春潮の眩き浦の橋わたる

芽柳の向うに水輪広りぬ

木洩れ日の山路に摘むや山椒の芽

さいたま　山本右近

あと一花標本木へ首のばし

花の雨土のくぼみの水鏡

夕桜墨絵の花に五彩あり

少し抱き少し歩ませ花の土手

花籠闇よりシテを誘へり

所沢　三好かほる

花人となりて昼餉のサンドイッチ

むさし野の池めぐり来て仏生会

春の風邪粥に生姜を少し入れ

野の匂ひ風の匂ひの野蕗煮る

うららかや尾長水浴ぶ小さき池

所沢　南雲秀子

雪柳枝垂るる下に亀並ぶ
吊橋を渡るや白き遅桜
桂昌院祀る御寺の紅枝垂
一列にランドセル行く新入生
河川敷走る仔犬や花大根

千葉　田中道江

○大寺に竹柏（なぎ）の実拾ふ日永かな
半世紀咲きつぎ今日を散る桜
花曇メロンパン屋の列につく
チューリップ開ききつたるしどけなさ
腹見せて駅舎縦横朝燕

千葉　松浦陵保

土産とて持ち重りせる柏餅
手踊の日舞に拍手春の宴
かさかさとベンチに積る春落葉
一尺の棒を片手に種蒔きぬ
若楓葉先ぐるりと朱色なる
海峡を一日に越ゆる開花かな

千葉　喜多恭仁子

珠洲焼の湯呑みに浮べ桃の花
卒業子母へ感謝のミニブーケ
花仰ぐ存命ならば金婚式
一周忌母の遺せし春ショール
恙無く術後半年蜆汁

千葉　大月玲子

垣越えて風になりたり雪柳
囀のクレッシェンドに終りけり
花冷や足裏に馴染む古畳
はくれんに脱力といふ力あり
伐採のテープの巻かれ花万朶

酒々井　竹澤竹里

春筍や土に埋れて色白く
石楠花やからりと晴れて室生道
大利根を跨ぐ風あり鯉のぼり
陽光を透してをりぬ柿若葉
白牡丹長き回廊狭めたり

佐倉　内海保子

春昼の大道芸の鳩ま白

啓蟄のにはとり土を掻きどほし

九段下に降りてこれより花見びと

県境をむすぶ山山さくら時

散らばつて花筏とはまだならず

佐倉　大内佐奈枝

うららかや鳩の歩める木のベンチ

○雀来るいまふらここの空ける席

穏やかな日ざしを背に菊根分

思はざるところに十二単増ゆ

春深む二十四孝の透し彫

佐倉　三屋英俊

花巡る十石舟や手に古地図

花見舟降りて昼どき南禅寺

入り混る光と影や飛花落花

石山に瀬田の川風桜餅

春の夢紫式部より返歌

佐倉　横川良子

回廊に僧の気配や春の闇

飛花落花文字の薄るる寺縁起

畔道は足裏に優しつくつくし

○珈琲にクリームの渦春深し

春嵐野川の堰に芥積む

四街道　奥太雅

きりきりと鳴いて田に降る河原鶸

塗畦に客土の色のひとところ

初花のことを枕に開演す

敦盛草母衣に小虫の通ふ孔

繰り返す球児のダッシュ花吹雪

四街道　塗木翠雲

春風を大きく回す風車かな

黄砂降る大地に渦の生れけり

廃校の母校跡地や草萌ゆる

卒業や擦り傷著きランドセル

一株に紅白分つ躑躅かな

船橋　山下良江

窓外の一瞬太き春の虹

大空の裾の図太き春の虹

放たれて犬駆け回る花の庭

木蓮の花咲き揃ふ墓参かな

やはらかに春風寄する夫の墓

船橋　大山春江

春の虹夕ぐれの町またぎたる
はてしなき砲火の空へ鳥帰る
赤煉瓦の癌病棟や養花天
咲き満つる昼の桜の仄白く
弘前城の外壕おほふ花筏

船橋　赤堀洋子

白蝶の縺れ離るる畑の土
沈丁の香に誘はれて道迷ふ
雀群れ連翹垣の花食めり
鳴き合うて恋の雀は屋根に消ゆ
○花潜り看護師のその急ぎやう

船橋　久保村淑子

倒木の木の芽立ちたる沼面かな
○ゴルフ中継鶯の声よく拾ひ
花仰ぐ色とりどりのスニーカー
一つづつ春を閉ぢ込め石鹸玉
電車待つ姿勢正しき新社員

船橋　片桐帆一

温泉駅空に百余の鯉のぼり
薄曇動かぬ水に蘆の角
雨の土手すずめ隠れに鳴く雀
描き上げし絵を送り出す清和かな
樟落葉追ひて下校の一年生

船橋　宮本加津代

春愁や胸の真青のとんぼ玉
そら豆のはしり少しを亡き夫に
満天星や咲き満ちてなほこぼれざる
手の平に受けてまた飛ぶ花吹雪
春眠やだれにも気兼ねなき暮し

船橋　中嶋久登

靴箱のすのこ音たて卒業す
房総の地震に押され地虫出づ
入学児防災頭巾の袋下げ
ソプラノの発声続く朝桜
飛花落花尊徳像の本染むる

柏　山本とく江

花人の皆和やかに擦れ違ふ
掌に眺め捨つる全き落椿
せせらぎに解るる憂ひ楓の芽

釣舟の帰る桟橋桜散る
婚の列落花の中を通りけり

柏　内田郁代

桜鯛一枚二枚と売られたり
教会の土手を埋むる諸葛菜
押し合うて雑木林の芽吹き急
煙草好きの師の句に会へり三鬼の忌
走り根の八方に噴く桜かな

柏　古川京子

春泥に見つけし土器の裏表
鳥帰るポプラ並木は白金に
夫が見てひととせ過ぎし紅枝垂
花吹雪ドミノ倒しのやうに墓碑
○ドレープのカーテン重し春灯

流山　穂苅照子

晴れ晴れと剪定の音空にあり
首振るもうなづくもかたかごの花
咲き満ちて影なかりけり雪柳
花の昼横座りなるカンガルー
○海色の車内広告夏近し

東京　名和政代

○似顔絵の唇さらふ春の風
つちふるや警察犬の訓練所
壬生狂言座席を立てば鉦の追ふ
紫雲英田に養蜂箱を積み重ね
笹鳴や竹やぶそよぐ芭蕉庵

東京　藤田裕子

花生けに彼岸の水をあふれしめ
揺り椅子にひねもすうつらうつら春
花疲れ臥してふたたび花の夢
借りて来し本に見覚えのどけしや
校庭の真中に欅百千鳥

東京　島野ひさ

荒川をのぼりてきたか初燕
対岸は今日満開の花の土手
腰おろす土手の若草濃く匂ふ
だしぬけや四月の霰弾けとぶ
ゆうらりと浮ぶ海月や葛西橋

東京　加賀葉子

○うしろより牛の鈴の音青き踏む

参道の延石白し春の月
掌にぱりぱりふくれ紙風船
風鐸の深き庇に足長蜂
煉瓦径目地のすき間にたんぽぽ黄

東京　久留島規子

余所様の慶事ばかりや花の雨
○くりかへし友の遺句読む花の雨（小板橋泰山さんを悼む）
走り根の瘤より出づる桜花
花の下靴紐かたく締めなほす
花筏割つてすんすん鯉の鰭

東京　下嶽孝一

花種を蒔き終へ母の忌の近し
春浅き光の中に退院す
春暁の光を散す稚魚の群れ
桜東風子ども歌舞伎の幕揺す
九十九里浜の置き去る桜貝

東京　草間三香子

花冷や鳩の群れゐる高架下
如月の魚板の音の固きかな
雨あとの杜に高ぶる薪能
冴返る雲間を赤いヘリコプター
川沿ひのフェンスに絡む郁子の花

東京　岡村純子

○桐咲いて深くなりたり空の青
包丁に弾くる音や春キャベツ
菜の花の迷路の出口見つからぬ
花の下反り身に急ぐ一輪車
ふと側に母の気配や春の宵

東京　桑原優美子

背の子のかすかな寝息花菜風
惜春や女一人の映画館
花終へて墓地はいつもの寂しさに
指しやぶる赤子もまじり花筵
満開の桜（六義園）黙して動かざる

東京　三村紀子

角曲る時振り返る一年生
○夕風に水の匂ひや遠蛙
新茶飲む引越の荷に腰かけて
雨後の垣木香薔薇の湧き立ちぬ
蔗風にひくひく止まぬ犬の鼻

東京　小池清晴

路地裏に欠けたる鉢の君子蘭
礼服の仕立直しや冴返る
墨堤に昭和のメロディ花の宴
荒川を下り桜と日暮まで
見はるかす木の間隠れの桜かな

武蔵野　砂地宏子

枝先に残る辛夷の白の濃さ
十字路を風切つてゆく初燕
廃屋の庭をタンポポ占領す
振り返る部屋がらんどう芽立時
ねそべつてボートゆらゆら青き空

昭島　疋田華子

父と子のボール蹴り合ふ花の下
花の屑ハートの形に溜
耕して甘き匂ひの土光る
花吹雪畝高高と屋敷畑
直会に辛口一献春祭

町田　広瀬俊雄

雨上る空の青さや花の色
倉敷川に芽吹く柳や船下り
倉紡の赤き煉瓦や蔦若葉
鉈彫の日向薬師や春日さす
○山伏の神木（しんき）のぼりや桜散る

町田　桔梗純

蕗味噌を前菜として山の宿
山の朝鉄の小鍋にしじみ汁
桜草鉢にあふるる理髪店
楓の芽母子観音へ燈を来て
花万朶社会人となる君祝げり

日野　喜多尾明子

半島は菜の花明り日照雨過ぐ
抱き取りて嬰に泣るる花あんず
満開の花くぐり抜け朝鴉
春宵の月の近さよ喪の帰り
○万愚節空から魚の降る話

横浜　西本才子

青空や花の雲張る霧笛橋
散り際の白さ増したり夕桜
枝ひくく四方へ広げ老桜

連翹の撓み小川を覆ひけり
夕暮の谷戸を明るく雪柳

横浜　大橋雅子

狛犬の大き阿の口春落葉
線路際の庚申塚にチューリップ
フリージア地震と思ひし時散りぬ
出港の船追ふ鷗花曇
同期会つまみは飯蛸柔か煮

横浜　山崎郁子

ダリア一輪筒に咲かせて飾りたる
春日射す竹やぶに窓閉しあり
出漁を望む漁師や能登の春
能登漁村津波の来る速さかな
奥能登の港寒鰤並べあり

横浜　田賀楳恵

幼子の微かな寝息花の昼
黄明るき木香薔薇の垣となる
花ゆすら愛でて話の弾みけり
放牧の牛の眸にある春の空
走り根のあたり花屑濃かりけり

横浜　三木豊子

杖置いて若葉の風を胸深く
捨て舟の艫綱ゆるむ春嵐
木の椅子に干菓子をふふむ花疲
屋形船桜吹雪のただ中に
丹沢の稜線あらは花の冷え

川崎　新妻奎子

念仏に和す蔵の谷渡り
独りごと言へば猫来る春の月
通過電車花の香さつと動きけり
透明な傘に触るるや若柳
春時雨即かず離れず老夫婦

川崎　大久保進

○亀鳴くや河童に代る池の主
聞き役に心定めて桜餅
短針の遅日を刻む古時計
花冷や厨の隅の割れグラス
藤房を抜けゆく風の甘さかな
弔文の弱き筆圧忘れ霜

悼　小板橋泰山さん

鎌倉　恒川清爾

借景の山なだらかや残る花
靴下駄と並ぶ空き缶花筵
初蝶やママに内緒と糸電話
蓮如忌や出店にがまの油売り
とりあへず締めにラーメン花の宴

横須賀　織田みさゑ

桜咲き山が身近に迫りくる
点となり長井耕地の揚雲雀
風邪ひきの薬包紙もて鶴折りぬ
さはやかに三人寄れば句会かな
四月はや鳶が輪をかく昼下り

伊勢原　佐藤和子

蟻穴を出て忙しげに楽しげに
○散らばつて蝌蚪の背泳ぎ立ち泳ぎ
雲垂れて多摩の横山竹の秋
巡礼の道へしだるる濃山吹
桜散る遠にきらめく相模灘

静岡　大村峰子

湖照りにゆらゆらつつじ燃えてをり
前山に二発聶く猟名残
春蟬の耳に居据る薄日中
初音かな雑巾きつく絞る時
通る度覗く牡丹の芽の赤き

静岡　海野みち子

留守十日庭一面に黄水仙
夫植ゑし片栗の花反り返る
雉子鳴くや開拓村の捨て畑
残雪や閉ぢて久しき峠茶屋
鷲の声の頻りや父母の墓

静岡　宮﨑知恵美

夕暮の峰に光るや春の雷
皺の手の握る岩海苔蜑の路地
税務署へ逃水追うて着きにけり
梅園や遠くに汽笛ぽーと鳴る
屋敷墓へ続く路なり犬ふぐり

静岡　望月敏男

風が風誘ひて揺るる梨の花
早春の橋また橋を船の水脈
風に聴き風止んで聴く匂鳥

鍵穴に鍵の入らぬ春の暮
一山に遠吠えのして寒明くる
静岡　藤原千代子
蟻出づる一匹づつが土咥へ
石垣の僅かな湿り蚤出づる
ボーロめく兎の糞や蕨狩
橋守の頬張るむすび若柳
マンションにダンボールの束春動く
静岡　荻野加壽子
初燕風に抗ひ風に乗り
春草へ鉄塔の影やはらかく
賃上げに縁無きくらし亀鳴けり
桜狩蓬莱橋を渡りきり
駅前の貸自転車屋飛花落花
静岡　小川明美
○金文字の髭題目へ春しぐれ
亀鳴くや隣の羅漢見る羅漢
梅東風や潮騒背に子規の句碑
料峭の宝永山の尖りかな
階につまづき富士のよなぐもり
静岡　藤本節子
春耕や一鍬ごとに土目覚め
継ぎ接ぎの長き木橋や黄砂降る
○洗はれて清明の空無限大
しやぼん玉一気に飛ばせおちよぼ口
深酒に舌を焦せる蜆汁
静岡　大長文昭
延べ段の継目つぎめや草青む
廃業をつぶやく籠屋花の冷え
稚児舞の足よく揃ふ廿日会祭
かたかごの花に師の声甦る
蒙古風蓬莱橋のど真ん中
静岡　加山ひさ子
春月の照す波頭の白さかな
つやつやのあんパンに臍風光る
○男シャツ脱ぎ捨ててあり農具市
校庭に声のなき日や飛花落花
鳥曇幹の裂けたる梅古木
静岡　石川裕子
石敷の隙間隙間のすみれ草

○かたかごの花へ光の波寄する
囀やピザ屋の屋根の片流れ
禅寺の垣の角刈り雀の子
アルバムの母の青春夕桜
静岡　本多ひとみ
初燕駅の広場を往来す
春日浴ぶ満面笑みの羅漢像
風車水子地蔵の背を撫づ
をちこちに鶯の声城下町
のどけしや風のままなる鳶の二羽
静岡　杉澤修
○蟻出づる竹刀の響く小学校
げんげ田の遥か雲間に活火山
背戸畑の猫の抜け道花大根
つちふるや仁王の脛の深き罅
賑はひに白の儚き夕桜
射水　成瀬真紀子
バドミントン高く打ち合ふ合格子
半音をのぼる調律目借り時
ルービックキューブかちかち万愚節
さざ波の絶えず新し菖蒲の芽
鶯の良く鳴き嬰のよく眠り
金沢　中條睦子
地震のこと多く語らず木の芽和
○師の墓やことばのやうに沙羅芽吹く
虚空に紅ちらして風の糸桜
清明や松の伐り株あからめる
人去つて川音のこる花の下
金沢　今越みち子
入学式売れて売れてと生菓子屋
川曲る所美しきや花万朶
桜東風風見飛行機ぶんぶんと
つちふるや山城めきて薬科大
我が影に包まれてをりチューリップ
金沢　伊藤美音子
紺青へ突き出す岬巣立鳥
拾ひあぐ土の湿りの落椿
逃水を追ふメリンスの鼻緒かな
雨樋に遊ぶ雀や養花天
掃き寄せて思はぬ嵩や花の屑

金沢　高田たみ子

奮闘のざんばら力士三月場所
お中日釈迦の絵解きに膝正す
目薬の一滴しむる三鬼の忌
花冷や線路工事の鈍き音
風光る塚に千代尼の辞世の句

金沢　豊田高子

○たかんなの獣光りをがばと剝ぐ
張り出して桜水面と光り合ふ
花の雲新幹線の駆け抜けり
初蝶の蹲踞に撒く黄のしづく
吹き降りや桜蕾を揺り起す

金沢　松井佐枝子

粛粛と剪定の空拡りぬ
春光や百畳の背戸開け放ち
大空へ芽吹く欅をうち仰ぎ
千代尼塚すみれ二寸の濃むらさき
○逃水や鉄板道路過ぎて海

金沢　石川純子

春疾風傘煽られて声に出て
築山にかかる石橋風光る
囀や枝折戸開く千代尼堂
ひとときの天地ほがらに初音かな
しやぼん玉消ゆるまで追ふ幼かな

金沢　河野尚子

三叉路の右は旧道花馬酔木
応援のつひに総立ち白木蓮
一人だけの返事大きく入学式
滾つ瀬に紛れぬ声や百千鳥
逆上がりに喝采浴ぶる春休み

金沢　道場啓子

避難して宿の雛に迎へられ
池の面に日の淡淡と花樒
浮草を揺して黒き鯉の影
百千鳥退職の夫送り出す
見はるかす能登の山並春満月

金沢　杉本年虹

肩までの黒髪風にフリージア
啓蟄の砂利を均して道普請
喃語増ゆ山茱萸の黄のほつほつと

花の雲城への橋を見失ふ
紫木蓮共学となる女学校

金沢　南　恵子

囀のあふれ一樹を揺せり
二三歩で渡る木の橋鳥の恋
田起しや鍔割れの土をちこちに
このあたりむかし外濠つくしんぼ
雲雀野に囲まれてゐる朱雀門

内灘　塩井志津

避難百日故郷へ一と日桜見に
春深し夢に生家を訪ひて
李咲く南仏よりのイーメール
薄霞連山いよよ遠ざかり
一捻ありし地をくれなゐに落椿

七尾　谷渡末枝

桜餅晴耕雨読有耶無耶に
弔文の推敲蛙の夜の更けて
咲くよりも散るを見に来よ花の駅
初燕家財道具の雨曝し
鍬入れて水面広ごる蛙の田
末黒野の灰の臭や手こぎ舟
鰆船明けの月背に湾を出る
草餅に母のにほひの小昼かな
廃城のあとに残りし山椒の芽
○黒板に感謝を記して卒業す

敦賀　倉谷ます美

おぼろ夜や匠こけしへ眉を引く
山下りる親子の猿や山椒の芽
島おいて湖おだやかや残り鴨
待たれたる小女子卓に三杯酢
民宿の膳へ鰆の海の色

敦賀　鷲田勝子

艫づくりの匠の手斧春刻む
恐竜に似ると吾子いふ去年の雪
手の凹に典座のたたく山椒の芽
風光る新幹線は敦賀発
霾やコンテナ並ぶ鉄路錆び

敦賀　中川雅月

行商の瀬戸の鰆を捌く朝

あちこちに固つてゐる葱の擬宝
築山の影絵のごとく朧月
山椒の芽摘む指先のあさ緑
松原に最後の授業磯遊

敦賀　中村優

草青む試合開始の深呼吸
寄生木にいのち委ねて老桜
会釈してつがひ囀る狭庭かな
街の灯の点描めきて雪の果
大臼歯の詰物はづれ雪の果

大阪　入山繁幸

漕艇の掛け声高し夏めける
淡路より卯波の中を連絡船
フリージア夕餉の卓に色と香と
詩を吟じ行く人の影青田道
更衣体操帽の園児たち

徳島　福島吉美

春障子島の旧家の刀錺
窯跡に水琴窟や鳥交る
赤松に脂の噴き出る日永かな
○大阪の地下に迷へる花の昼
木偶の鈴祝賀に響く日永かな

徳島　村上和義

蝉音と黄砂に煙る基地の町
春あられ弾く天守の鬼瓦
たんぽぽを避けて坐りし少女かな
鳶の舞ふ浜に湯気立つ白子干
泡盛で交す献杯島薄暑

徳島　宮西修一

○離陸音ひびく海辺に若布寄す
休田の畦は空色犬ふぐり
水温む鴉の歩く潦
春泥へ飛び込んでゆく三輪車
学校は津波避難所卒業す

徳島　平岡功

園児らの放流稚鮎煌けり
河川敷吟詠伸ぶる雲雀東風
生垣の膨らみ垂るる雪柳
美術館出れば芽柳蔵の町
眼の前の眼のまた前の蕨摘む

石井　木内マヤ

ちようちんのあやしく揺るる花かがり
瞬きは囁きのごと春の星
四月馬鹿犬は狐に似てきたり
境内にたんぽぽひとつ杖の先
花かりん子は口紅を新調す

小松島　岡田あゆみ

さまざまな音立つ厨あたたかし
ちぎれ飛ぶ雲の間を鶴帰る
落ちてすぐ土手歩き出す雲雀かな
廃校や蝶が蝶追ふ運動場
燕来る荒石組みの防波堤

室戸　安岡みさき

○岬の風空へ空へと花散す
杖一つ置き去りに発つ遍路バス
海風を満腹にして鯉のぼり
落花浴び三百余段の磴のぼる
歩くことかくも楽しく風薫る

長崎　丸本祥夫

茂吉歌碑つぶやきをれば飛花落花
春光へ赤子の動く足の指
菜の花の毛氈となる岬かな
島伝ひ浅葱斑の大移動
春の野の弁当狙ふとんびかな

西海　山下敦子

姫皮にぬくもりのあり春筍
花びらのゆるりと流れ石畳
一斉を好まぬもあり残る花
作業船の脇をするりと花筏

○春愁やガザの爆撃吾にも咎

宮崎　中山宣

落椿机に展げ子ら去りぬ
養生の芝に伸びたり名草の芽
うららかや寿限無寿限無の子の落語
白梅や翅音震はせ虫来る
春駒の鹿毛の色濃き都井岬

宮崎　中山芳教

簸の梅一輪ごとに輝けり
残り鴨流れのままに浮寝かな
産土の儀式の斎火春立ちぬ

高千穂町建国祭　二句

山笑ふ社の杜に東天紅
建国祭木剣響く神の里

宮崎　鳥居達史

囀や眼閉ぢゐる磨崖仏
粽結ふ義弘公を語り継ぎ
草の戸の主人一国葱坊主
筍に里の黒土弟の忌
春筍を剝けばころがり出る光

那覇　大湾宗弘

首里坂に春を芽吹かぬ大赤木
子の骨は薄くてかろし桜貝
駐車場に空の一文字霾ぐもり
浜下りやみやらびの声遠くまで
水切りの石よく跳ねて春の夕

那覇　中本清

○人界をうかがふ鷹へ春日濃し
啓蟄に拾ふ遺骨や石の黙
春昼や樹液にくづれゆく大樹
いのちその証ふつふつ春の蝶
城垣の根石ゆるめり竹の秋
晩節は水の如くに清明祭

西原　宮城勉

亡弟に納税通知万愚節
流鶯の効かす小節のやや外れ
仕事着（養父の）の死装束や花曇
花散るや喪服離れぬ二三片
メメント・モリメメント・モリと落花かな

ベルリン　鈴木波江

ヴァージニアの森のひろらか春の鳶
借り本を読みつぐ夜や菜種梅雨
沈丁花けふは手折らず雨の坂
波立ててビーバー泳ぐ花かんば
○丘ひとつ柵に囲へり春の馬

「万象」新人賞速報

第二十二回「万象」新人賞が次の方に決まりました。

一由（いちよし）　久美子（東京）

万象俳句会

同人会だより

幹事会報告

大久保　進

5月21日、東京文化会館に於いて同人会三役と幹事合わせて11名の出席と、江見主宰にご参加いただき同人会の幹事会が開催された。

本会では、令和5年度収支決算報告と本年度の収支予算案について審議され、いずれも滞りなく了承された。

一、令和5年度収支決算の概要

当年度より同人会総会が「万象」全国俳句大会との共同開催となったことから、開催収支の赤字分を万象俳句会と折半での負担となった。別開催としたこれまでの同人会総会に比べて、共同開催の相乗効果により会場費、会食費等で負担額の低減に繋がった。第5回中山純子記念俳句賞関連では、28名の応募があり、表彰者（正賞・準賞・特別賞）の皆さんに副賞を授与した。全体では、前年度に比べて収支が改善されたことから、次年度への繰越金も予算比若干の増加となった。

二、令和6年度収支予算案

同人会総会・「万象」全国俳句大会の開催費用が物価上昇の影響を受け、会場費や会食費等が値上げとなる。管理費用においても、物価高騰による価格引き上げが予想され、これらに対応した予算となった。

〈新会員のご紹介〉

四月の新規同人加入者です。

南　恵子様　金沢市（「風港」終刊により）

五月の新規同人加入者です

河原昭子様　石川県河北郡（「風港」終刊により）

松下信子様　金沢市（「風港」終刊により）

四月の新規加入者です。

能任康子様　石川県かほく市（「風港」終刊により）

上野冨喜子様　金沢市（「風港」終刊により）

辺野喜宝来（べのきほうらい）様　那覇市（「りいの」終刊により）

稲嶺有晃様　那覇市（「りいの」終刊により）

髙嶺容道様　那覇市（「りいの」終刊により）

大城末治（おおしろすえじ）様　那覇市（「りいの」終刊により）

宜野（よしの）　顕（あきら）様　沖縄県宜野湾市

五月の新規加入者です。

森　桂子様　横浜市（「風港」終刊により）

井端久子様　金沢市（「風港」終刊により）

菅原雅子様　金沢市（「風港」終刊により）

橋本紀代子様　東京都練馬区

5月の「万象」オンライン同人句会高点句

【9点句】

てふてふの一筆書きの行方かな　神田美穂子（富士）

【8点句】

散居村水攻めのごと田水張る　成瀬真紀子（射水）

【5点句】

鯉のぼり高し朝市瓦礫跡　久保村淑子（船橋）
復興のちから尾に満つ鯉のぼり　下嶽　孝一（東京）
たんぽぽの絮に半分だけの風　穂苅　照子（東京）
永き日や使はぬ機を乾拭きに　谷渡　末枝（七尾）
白牡丹長谷のきざはし狭めたり　竹澤　竹里（酒々井）

【4点句】

バス減便つばめは今日も往き来して　内海　良太（佐倉）
修司忌の雨を鳴らせり柿若葉　荻野加壽子（静岡）
鮎釣られ白山よりの風に舞ふ　三屋　英俊（佐倉）
須弥壇に一匹の蜘蛛棲まはせて　中條　睦子（金沢）
余花の庭猫ゆつたりと息つかふ　古川　京子（柏）
みつびしもトンボも2B新入生　谷渡　末枝（七尾）
鯉の影大地に躍る立夏かな　沢辺たけし（流山）
雀らも来よげんげんの風浴びに　曽根　満（静岡）

【3点句】

桐咲いて深くなりたり空の色　岡村　純子（東京）
引き波に打ち合ふ小石夏隣　芝宮留美子（佐野）
新聞紙尖らせ包む淡竹の子　荻野加壽子（静岡）
WiFiの届かぬ葉蔭かたつむり　大久保　進（川崎）
大利根を跨ぐ風あり鯉のぼり　竹澤　竹里（酒々井）
木も草も人も騒めく五月かな　内田　郁代（柏）
夏兆す吉野帰りに陀羅尼助　大木　茂（足利）
庭石に木洩れ日をどる若葉風　山本　右近（さいたま）
緑蔭は古書の匂ひや古書の市　入山　繁幸（大阪）
饒舌な女が一人サングラス　宮西　修一（徳島）
母逝きし齢を生きをり蕗を煮る　山下　敦子（西海）
病む母の句帳千句や牡丹咲く　中川　雅月（敦賀）
陽炎や走らぬ線路歪みをり　桑原優美子（東京）
きらきらと赤子のよだれ柿若葉　喜多尾明子（日野）
丘ひとつ柵に囲へり春の馬　鈴木　波江（ベルリン）
壬生狂言座席を立てば鉦の追ふ　名和　政代（東京）

（＊句頭の数字は点数を示しています）

珈琲ぶれいく㊿

今回も古今の佳句・名句に触れながら遊んでゆきましょう。空所にサンズイの付く漢字を入れてみましょう。

1 叙山に灯がつきにけり床□み　青木月斗
2 ひらかなの柔らかさもて春の□　富安風生
3 水枕ガバリと寒い□がある　西東三鬼
4 花□いて雲となる日の日高川　上田五千石
5 夏の□赤き鉄鎖のはし□る　山口誓子
6 谷深み杉を□すや冬の川　夏目漱石
7 ほろ〳〵と山吹ちるか□の音　松尾芭蕉
8 秋立つや川□にまじる風の音　飯田蛇笏
9 ぼうたんの百のゆるるは□のやうに　森　澄雄
10 螢火の明□□の□かりき　細見綾子
11 鞦韆は□ぐべし愛は奪ふべし　三橋鷹女
12 □みゆく海月みづいろとなりて□ゆ　山口青邨

【正解】
1 涼　2 波　3 海　4 湧
5 河・浸　6 流　7 滝　8 瀬　9 湯
10 滅滅・深　11 漕　12 沈・消

思い出す人々　第17回【どこかの】

西山　厚　全24回

ずっと前のことなので、正確には覚えていないが、新聞の俳句の欄にこんな句が紹介されていた。確か、七歳くらいの女の子の作品だったと思う。

空豆を空にかざして食べてみる

いいなあ。空豆は大好きで、どんなふうにして食べてもおいしいが、やっぱり塩ゆでが一番だ。でも空にかざして食べたことはなかった。それからは、時々、こっそり空にかざして食べたりもする。

こちらは七十歳くらいのおばあちゃんの作品だったと思う。

深緑に吸い込まれそう吸い返す

いいなあ。深緑に吸い込まれそう、と口にする人は少なくないが、吸い返すとは！　最高だ。それ以来、深緑を見るたびにこの句を思い出す。向こうもこっちも命みなぎる深緑の季節。

私は俳句を作らないし、生活のなかに俳句があるわけでもないが、五七五にしてみるだけで、簡単に世界とつながり、ひとつになれるのがおもしろい。言葉の魔法。この女の子、おばあちゃん、どうしてるかな。

（注）広辞苑に「深緑」は濃いみどりいろ。ふかいみどりとありますが、歳時記には「新緑」「若葉」「青葉」等が記載されております。

同人作品の佳句

江見悦子

馬の背を磨いてをりぬ花曇　大内マキ子

春の遅い北海道にも桜が開き、馬も馬場に出られる季節となった。厩務員が馬の大きな背にブラシをかけている場面を想像した。世話をされている馬も、穏やかで気持よさそうだ。馬に話しかけながら丹念にブラッシングしている姿からは馬を愛し馬と一体になろうとしている心が伝わってくる。

遠目にも大手振りたる春の土手　髙野松風

情景のよく分かる句。散歩中の作者の目に映ったのは向こうの土手を歩く人、元気に大手を振っているのは年配の人物のような気もする。いつか作者の心も弾んでくる。これも「春の土手」だからこそ。省略の効いた句。

蓬摘むデイサービスの車停め　阿久津勝利

お年寄りを送迎するデイサービスの車が道の端に止まり、何人かが車を降りて蓬を摘んでいる。車の窓から眺めているお年寄りもいる。摘草は郷愁を誘う懐かしい光景だ。デイサービスの一場面を捉えた、明るい句となった。

大寺に竹柏（なぎ）の実拾ふ日永かな　田中道江

竹柏は梛とも書き、常緑高木で西日本の暖地に自生する。熊野地方で神木とされ、竹の葉に似る葉を鏡の裏や守り袋に入れて災難除けにした。筆者が新宮市の熊野速玉大社に詣でた時、樹齢８００年の梛の木に出合った。売店には魔除けとして小さな鉢に入った梛が並んでいた。梛の実はまん丸。時の経つのを気にせず、子供に戻って拾っている作者。

花潜り看護師のその急ぎやう　赤堀洋子

看護師はいつもきびきびと動いているが、作者が見かけたのは桜の下を早足で行く看護師。「その急ぎやう」と、理由は想像に任されているが、院内での仕事を離れて私用で急いでいるのでは？　深刻なことではなさそうだ。立ち止まって花を眺めたらよいのに、と思っている作者。何かストーリーがありそうな一場面を切り取った。

ゴルフ中継鶯の声よく拾ひ　久保村淑子

どこからか鶯の声が聞こえる、付け放しになっているテレビからの鶯の鳴き声だ。画面には森に囲まれたゴルフ場。ああそうだったのか、それにしてもよく聞こえると、聞きほれている作者。ゴルフ中継の画面から響く、臨場感ある鶯の声を詠んだ珍しい句。

似顔絵の唇さらふ春の風　名和政代

京成電車の上野地下駅の近くに上る階段がある。そこで似顔絵を描いていた名物のおじさんを、最近は見かけなくなり何となく物足りない。この句は「唇さらふ」が眼目。イーゼルに懸っていた絵が一瞬の風にふっと空中を舞った。目に残ったのは、大きく赤く塗られた女性の唇。春風のいたずらか、意表を突かれた瞬間の動きと色彩が印象的だ

山伏の神木（しんぼく）のぼりや桜散る　広瀬俊雄

「神木のぼり」が耳慣れなかったので調べてみた。神奈川

県伊勢原市の日向薬師の春季例大祭に合わせて行われる儀式とあり、元元は修験者が安全を祈願して行ったものという。「しぎのぼり」とも。法螺貝の音に始まる儀式の圧巻は、斜めにかけ渡した高さ数メートルの椎の木の柱に登った山伏姿が祈願文を読み上げ、山刀を抜いて邪気を払う場面、大音声のおらび声に山桜が降るようだった、と作者の話。

亀鳴くや河童に代る池の主　大久保　進

亀には鳴くための器官がないため鳴くことはなく「亀鳴くや」は遊び心と想像力の所産である、と歳時記にある。作者の眼前には亀がたむろす古い池、その中の大亀がこの池の主のようにも思える。河童伝説も伝わっていそうな池だが、今や家主が交代したのか、などと想像の翼を広げる作者。亀、河童と連想を飛ばした。カ音が頭韻を踏み、俳味のある愉快な句となった。

かたかごの花へ光の波寄する　石川裕子

かたかごは片栗の古名。万葉集に大伴家持の歌が一首収められている。〈もののふの八十娘子(やそおとめ)らが汲みまがふ寺井の上の堅香子の花〉家持が越中の国守だった時に詠まれた歌だ。かたかごは山林の半日陰に群生し、丈は10センチほど。紅紫色の花を下向きに開き、6枚の花弁が反り返る。掲句は晴天の下、片栗の花を揺らす風を「光の波」とたとえ、一面の花の可憐さを写生した佳句。

師の墓やことばのやうに沙羅芽吹く　中條睦子

中山純子先生の墓に植えられている沙羅（夏椿）が芽吹いたのだ。まるで「ことばのやうに」。

その下で釈迦が涅槃に入ったとされる沙羅双樹のシャラは日本では育ちにくく、寺では聖樹として夏椿を植えることが多い。芽吹きの清らかさ、瑞瑞しさは花と共に魅力の一つ、作者はその芽吹きに師の言葉を聞いたのだ。「応援しとるよ、がんばりまっし」。その言葉を真直ぐに受け止めている作者。「ことばのやうに」と感じた飛躍が素晴らしい。

逃水や鉄板道路過ぎて海　松井佐枝子

沢木欣一先生の句に〈鉄板路隙間夏草天に噴き〉がある。石川県の内灘砂丘が米軍の砲弾試射場となったことに対する接収反対闘争の中で、昭和28年に詠まれた社会性俳句の一句である。資材や砲弾を運ぶために砂丘に敷かれた鉄板路、自註には「非情な鉄板路より夏草の方が強い」とある。

掲句は、逃水を追って鉄板道路を過ぎるとその先には夏の海が広がっていた、という情景。「逃水」という季語に、昔日の内灘に寄せる思いがある。

人界をうかがふ鷹へ春日濃し　中本　清

鷹は種類が多く、夏季に日本にやって来る夏鳥もいれば、渡りをしない留鳥もいる。掲句はどちらとも分からないが、作者が詠みたいのは「人界をうかがふ鷹」なのだろう。うらうらかな春の日を浴びている鷹、その鋭い目に人間世界はどのように映っているのか、穢れのない世界である筈はない。作者自身が鷹の目になって高みから鳥瞰しているようにも思える。社会性を感じさせる句。

鷹

西本才子

鷹一つ八菅山の空を高舞へり
実千両庭の高みに屋敷神
筆塚に狸の足跡見失ふ
神官の家に庭師や小晦日
池二つ鯉を沈めて冬の水
草萌や牛放ちたる土手の下
池へ張る枝の分れに小鳥の巣
一筋の流れに芹の盛り上る
提げて来る彼岸詣の薬缶かな
網に獲るわかさぎに雨募りくる

コロナ禍のため遠出の吟行はしていない。偶偶友人に誘われ。中津川に近い八菅山の麓の緋鯉を飼う家へ案内してもらった。この辺りは山岳信仰の霊地で、地区の人人は今でも神式で生活を送っているそうだ。

青空に八菅山が紫に輝く、喧騒のない静かな里だ。

この近くに師と句会で来たことがあるのを思い出し、懐かしかった。

鶏が高い声で騒がしく鳴き、陽ははや西に傾いていた。3月には賑やかに祭があるとのことである。

桜人

砂地宏子

集ひたる老若男女桜人
峠越え奈良の都の遠霞
夕暮れの馬酔木の花や阿修羅像
階を観音堂へ朝桜
線刻の仏の供花や山桜
又兵衛は風吹くままに花吹雪
人麻呂のゆかりの里や蛙鳴く
晴れ渡る飛鳥の空の揚雲雀
赤黒と緑の鬼も花会式
下中と奥へ空へと山桜

奈良、長谷、大宇陀、飛鳥、吉野と桜を追うバスツアーに参加した。4月9日から三泊四日。個人で行きにくい場所も効率よく回れた。しかも、例年より桜の開花が遅れ、どこへ行っても満開の桜。桜の開花時だけ賑わう小さな寺。その前に出された臨時売店。菜の花とせせらぎの先にあった一本桜。奈良も吉野も人が多かったが、一緒に桜を見つめた人人の目の輝きや歓声。どれも忘れがたい光景である。

さっぽろ雪まつり

佐藤 哲

北海道の冬の風物詩「さっぽろ雪まつり」が4年ぶりに全面開催された。大通り会場・すすきの会場など3会場で雪と氷の祭典となった。佐藤哲さんは札幌に隣接する江別市在住で朝机上の紙に何やら書き、庭の草木と語らい、街を歩きお気に入りの喫茶店へとお元気である。

窓硝子しばれ模様は冬の花

寒さが生み出す芸術「窓霜」と呼ばれ空気中の水蒸気が凍って針状・羽毛状・樹枝状など窓硝子に花が咲いたように氷の模様が付く。作者は「冬の花」と詠んだ。

鉈で割る大き南瓜の甘さかな

北海道は昼と夜の寒暖差が大きいので南瓜の澱粉量が増える。南瓜の生産量は日本一となっている。硬くて包丁では切れない「まさかり南瓜」がある。鉈とハンマーで割る。栄養豊富でホクホクした食感と甘みが魅力。

街に出る熊の足跡電気柵

札幌市の住宅街でも熊が出没を繰り返し畑の作物が被害にあった。人が住む地域に熊が近づいて足跡の目撃情報がもたらされている。緑豊かな地域が広がり、熊が住める森が続いているからだという。熊が入ってこないよう電気柵の防御措置がとられるようになった。

老いの身に追へぬ硬さや残る雪

老いの身は御謙遜であろう。昭和3年生まれの作者は塑鍬として雪まつりの大雪像を楽しみ、飲食ブースを堪能された。幾日も消えずに残っている硬い雪は困る。

島根の秋

河野尚子

金沢市在住の河野尚子さんは晩秋に山陰を旅し、松江城・足立美術館・宍道湖・出雲大社を訪れ神話の里の一端に触れることが出来た。これからも普段のこころで自分なりの発見と感動を大切にしたいと述べている。

大観の絵画の窓辺新松子

島根県にある足立美術館は近代日本画を中心に展示している。その中でも日本画の第一人者横山大観の作品が特に有名である。日本一を誇る庭園があり、作者は新しく出来た松毬等を見て庭の明媚な眺めに感激している。

燕帰る出雲の高き築地松

出雲平野に点在する築地松は四季を通じて絵の様に美しい景観を保っている。冬の季節風を防ぐ防風林として屋敷の西側と北側に一定の高さに整然と刈り込まれている。黄金の穂波と築地松の上を燕が南方へ帰って行く。

身に沁むや出雲風土記を卓上に

出雲国風土記は和銅6年に聖武天皇に奏上され「国引神話」を始めとして出雲に伝わる神話などが記載されている。現存の風土記の中では唯一完本の状態という。作者は神話の世界に触れて体に深く沁み入る様に感じた。

天高し遠に威風の伯耆富士

大山（だいせん）は鳥取県にある中国地方の最高峰で見る方角によっては富士形の端正な山容から伯耆富士と呼ばれる。作者は松江城から遠くに眺めた伯耆富士が青空に威風堂堂とそびえ立っていることに感激した。

同人作品鑑賞（五月号）　中本　清

冴返る木目のしるき箱階段　阿部　澄

暖かくなりかけて、また寒さが戻った感覚を表現するのに作者は「木目のしるき箱階段」を取り合せた。箱階段とは、旧家に見られるような箱を積み重ねた形式の階段で、側面から物入れなどに利用する。底冷えのする薄暗い場所に設けられており、驚くほど急勾配の階段である。そこを上下すると、足裏に感じる冷たさだけなく、古色感、木の香り、軋む音などの感覚が「箱階段」から伝わってくる。

等身の姿見にある春愁　宮本加津代

春は、陽光に花が咲き、囀りの季節でもあり、別れの多い季節でもある。大切な人と別れた寂しさなど、春の日におぼえる愁いは人によってそれぞれ異なる。ふとしたことで、何となく理由もなく、気がふさぐこともある。作者は、姿見に向かい、「私は私、特別に気張って背伸びなどしない、ありのままの自分でいこう」ともう一人の自分に語りかけたのだろう。

春近き鯉に浮力の戻りたる　穂刈照子

作者は、池の底に潜む鯉がゆったりと動き出したのを見たのだろう。捉えた対象から受けた印象をもう一歩近づいて、「ありかた、ありさま」に着目し、それを「浮力の戻」ると表現した。「浮力」には、唇の厚い黒い物体がゆったりと動く様が目に浮かんでくる。万物が活動し始める春を待つ心の様相も伝わってくる。対象を描写するだけでなく、昇華し、かつ自立した言葉には力がある。

青空へメタセコイヤの芽吹きたる　田賀楳恵

生きている化石とも呼ばれる落葉高木のメタセコイア。中国原産であるが、国内各地の公園や並木に植えられている。大きなものは高さ30m、幹の直径は2mになる。端正な樹形が空高く芽吹く様子は壮観であろう。２００万年前に栄えた植物が、今年も命を継いで成長の兆しを見せる。作者の感動が「青空へ」で伝わってくる。

春立つや球子の富士の赤の濃き　恒川清爾

片岡球子は、昭和・平成に活躍した女流日本画家。情熱の色彩と力強い画風で知られる。代表作の赤富士シリーズには春夏秋冬の富士が描かれている。雄大無比、厳しく、美しい富士を敬う純粋な想いが伝わってくる。立春になると、球子の富士も雪が溶けはじめ、眩しく深い赤の山肌が出現する。「春立つや」と切ったことにより、赤富士に魅了された作者の心意気が表れている。

子規の俳句鑑賞（三）

林　徹

着物干す上は蟬鳴く一の谷

明治二十八年作。前述のごとく子規は四月、大陸へ渡ったが、五月十日、講和成立の報に接し、同十四日、帰国のため大連湾から佐渡国丸に乗船、翌日出帆した。この船中、喀血し、二十三日、神戸に上陸するや担架で神戸病院に収容された。その後七月二十三日、須磨保養院に移り、八月二十日、同所を出て広島経由松山へ向かうこととなる。

掲出句は須磨で作った一句。散歩していて逢着した景であろう。竹竿に干された着物へ、裏山の一の谷から蟬の声がふりそそぐ景を描いている。この句も構成的で、源平の古戦場一の谷と、現世的庶民的な竹竿の着物との付合に意表を衝かれたような新しさを覚える。

子規は写生を勧めたが、現実ベタ写しの写生に偏していたわけではない。たとえば明治三十年、「ほとゝぎす」に書いた「俳諧反故籠」では、次のように述べている。

「無秩序に排列せられたる美を秩序的に排列し、不規則に配合せられたる玉を規則的に配合するは俳人の手柄なり」

子規俳句がしばしば構成的であるのは、このあたりに由来するのであろう。

行く我にとゞまる汝（なれ）に秋二つ

明治二十八年作。須磨保養院を出た子規は八月二十五日、松山に帰省、二十七日、松山中学校で教鞭（きょうべん）をとる夏目漱石の下宿に移った。愚陀仏庵である。この日から、子規が帰京の途に着く十月十九日まで、二人の同居生活が続くこととなる。漱石は子規と同年、東京大学予備門以来の親友であるが、本格的に俳句を始めたのは、この同居生活によってであった。

掲出句は十月十九日、旅立つ子規から漱石へ留別の一句。この家で二月（ふたつき）ばかり君と一緒に暮らしたが、今日からは、旅立つ自分の秋と、松山にとどまる君の秋と、二様の秋になることだ、と惜別の思いを述べているのである。「秋二つ」は、抽象的な秋を具象に転じた趣があって、うまい表現である。レトリックのうまさだけではなく、真情がここに溢れている。

（次号につづく）

『子規・写生―没後百年―』（沢木欣一編　角川書店）より抄出

『万葉集』にたずねる抒情の源流 ⑬

橋本 渭

「もののふの　八十宇治川の　網代木に
いさよふ波の　行くへ知らずも　（三・二六四）

「（もののふの八十）宇治川の網代木のところで停滞している波のように、これからどこへ行くのか分からないことだ。」

柿本人麻呂が近江の国から上って来る時、宇治川のほとりで詠んだ歌です。「もののふの八十」は「宇治」の序詞。「もののふ」とは朝廷に仕える文武百官のことで、それは「八十」―数多くの―氏から成るので、「宇治」を導くわけです。「いさよふ」、中古以降はイザヨフに変化。

網代木に遮られ、停滞して波立っている川の水を眺めながら、自分もまた「行くへ知らず」だなあという感慨を催しています。どこへ行くのか定めない川の波に仏教的無常観を感じているという解釈が昔からあります。しかし、無常観は時間的観念だから、「行くへ知らず」という空間的な認識とちょっとそぐわない。

この時代、旅の歌は、肌身に感じる辛さを嘆き、家郷や家人への思いをそのまま訴えるのが一般的でした。すぐ次に出てくる長忌寸奥麻呂の歌はその典型です。

苦しくも　降り来る雨か
三輪の埼　狭野の渡りに　家もあらなくに　（一六五）

しかし、表題歌はそのような具体的な体験でなく、旅そのものが喚起する思い、すなわち旅情というものを歌っています。それは安心して身を寄せていられるところから離れていることで覚える、たゆたっているような心細さやわびしさで、一言で言えば漂泊感ということになるのではないか。

人麻呂は行幸に従駕することもあった人だから、勿論、行方定めぬ旅鳥などではありません。それがあたかも漂泊者になったかのような歌を詠んでいる。そこに体験をそのまま訴えるのではない、もう一つの抒情のあり方が現れています。すなわち、自分がさすらい人になったような気分で風景を見ている。そして、そういう心のあり方から生じる感慨、つまり、旅のあわれというものを、人に訴えるのではなくて、自分自身で味わっている。

稲日野も　行き過ぎかてに　思へれば
心恋しき　加古の島見ゆ　（二五三）

同じく人麻呂の歌ですが、通り過ぎて行く土地に寄せる眷恋の情は、まぎれもなく漂泊者のそれです。そして、こういう一種の文学的態度が後の文人や文学者を刺激しました。「片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず」と言って、『おくのほそ道』の旅に出た芭蕉。その人生を、「旅人の生涯であったばかりでなく、漂泊者の生涯であった」と評した島崎藤村（「春を待ちつつ」）。その藤村の「千曲川旅情の歌」に、「いくたびか栄枯の夢の　消え残る谷に下りて　河波のいざよふ見れば　砂まじり水巻き帰る」（「藤村詩抄」）という一連があります。私はそこに人麻呂の宇治川の歌の影響を認めます。

万象ノオト

テーマ『動物園』

句作の場所

静岡　荻野加嶺子

住まいから2キロほど南に登ると静岡市立日本平動物園がある。名の通り日本平の裾に位置している。大きくはないが約160種700点の動物が飼育されている。今年で開園55年。

家の西隣が空き地だった40年程前の朝の出来事。窓を開けると何と孔雀が目の前に、こんな時は声も出ずただ凝視。孔雀は見事な羽を広げて見せた。暫くして飼育員が到着し無事捕獲された。当時鳥のケージに屋根がなく、孔雀も飛べる鳥だったという訳だ。現在は屋根まで金網で覆われている。

噛んで水飲みたるキリン鰯雲

秋の声犀はしづかに眼を瞑り

それ以外にも句材となってくれた動物たち、今はいないものも。しかしここは動物以外にも四季折折の自然が豊かで句作には絶好の場所でもある。

戦時下の動物園

横浜　小板橋泰山

麒麟や象などの大型動物が好きな私は欧州への海外出張の際に、空き時間を探して現地の動物園に立ち寄ることがあった。80年代に公団との商談のため出張したポーランドでワルシャワ動物園を訪問したことが記憶にある。楽しい見学であったが当時特別な思い出はなかった。

最近になって驚くべき80年前の事実を知る事になった。第二次世界大戦下、ワルシャワ動物園のポーランド園長夫妻が命を懸けて、ナチスから迫害を受けていた300人を超えるユダヤ人の命を助けたという。危険が迫る中、知恵と機転で、300人のユダヤ人を、がら空きになっていた動物園の園舎や地下にかくまって彼らの命を守り抜いたのであった。園長夫妻は「すべての愛は等しく、守られるものである」との言葉を残した。ナチスの圧政下にあって、園長夫妻は愛と信念を貫いた。その逸話が2017年に映画化されたのである。

山くじらと獺

静岡　望月敏男

雪の降る街景色の中に、大きく「山くじら」と看板がある。歌川広重が描く名所江戸百景の「びくにはし雪中」である。「山くじら」とは何だろう。山に鯨がいるはずもなく、猪の肉をそう呼んだ。獣肉食がタブー視された時代の隠語である。忌みつつも滋味が豊かなことはよく知られ、とりわけ寒中に「薬喰」と称して食べていた。

9月19日は糸瓜忌である。獺祭忌という呼び名がある。獺の字はカワウソとも読む。カワウソは多くの魚を獲り、祭るように並べて食べると言う。「獺魚を祭る」が春の季語にある。子規は、書物を散らかし置く自分をカワウソになぞらえて「獺祭書屋主人」と号した。「豺獣を祭る」の豺は狼のことで、秋の季語である。ニホンオオカミは絶滅。ニホンカワウソもまた。

大谷選手の象

札幌　竹重富子

大リーグドジャーズ大谷翔平選手が北海道日本ハムファイターズの選手だった頃、あるファンイベントで、お題を貰って絵を描き、ファンがそのお題を当てるというゲームに登場した。

お題は「動物園」。ちょっと困った顔を見せた大谷選手は、ややしてサラサラと、象とその囲いの絵を描いた。すぐに「動物園」と声が上がった。

その時のうれしそうな大谷選手の愛らしさと、絵のうまさと、そして「動物園といえば象なんだ」ということがとても印象に残った。

それ以来、動物園に行くとじっくり象を観察。キリンもゴリラもライオンも日常とはかけ離れているけれど、巨大な象にはやはり圧倒される。

野球といえば大谷選手というようなものかしら。ちょっと逸れました。

動物園吟行の思い出

東京　鶴田智美

木内徹子先生がお元気な頃、「青の会」では毎月、吟行を行っていました。

浅草、王子、皇居、飛鳥山、西新井大師と、数えたらきりがありません。吟行に行く度、写真と句入り吟行記を作成し、参加者に配りました。

上野動物園にて

檻の鷲鋭き眼失はず　重
大鷲の眼檻より睥睨す　要
大鷲の和毛だらけや檻の内　徹子
独り身のパンダうつむき日向ぼこ　智美

披講が終わると批評し合い、重先生に添削していただきました。

多摩動物園にて

若葉風獣の匂ひ運びくる　要
檻の鷲若葉散らして滑空す　充子
ライオンも日ざしをよける青葉影　信

今ではほとんどの方が鬼籍に入り、吟行もなく寂しい限りです。

花吹雪

敦賀　為永香月枝

昨今動物園とは縁遠くなっていますので、孫たちの幼少の頃に記憶を戻してみました。私共の住む敦賀市から京都は電車なら1時間の所です。府立の岡崎動物園へはよく行ったものです。日本で2番目に古い園とか、こじんまりとして幼児連れには最適です。

先ずキリンのお出迎えで孫たちの笑顔が始まり「ぞうさん」「アイアイ」を歌いながら走り回ります。桜の頃は花吹雪を追いかける孫も動物たちの仲間入りしたような気分に。

対照的なのが旭川の旭山動物園でした。広大な敷地に自然に近い環境での動物たちの営みは緩やかでした。大人も充分に楽しめる所です。旅の企画をしてくれた孫娘から、感想を聞かれ、歩き疲れた私は「夕張メロンが一番」と言い後後の語り種になっています。

「万象ノオト」投稿募集

▽11月号「掃　除」（7月末日締切）
▽12月号「水　筒」（8月末日締切）
▽長　さ　本文　17字×19行以内
▽投稿先
〒417-0861
富士市広見東本町14－14
神田美穂子

江見悦子自選句鑑賞 ⑩

宙泳ぐ瓜の巻きひげ沖縄忌

（「砂時計」137）

沖縄忌は6月23日。太平洋戦争末期の昭和20年、沖縄は太平洋戦争最後の決戦地となったが、この日、牛島満中将以下司令部が自決、日本軍の組織的戦闘が終結したとされる日。沖縄県はこの日を「慰霊の日」とし、全戦没者の御霊を慰めるため、毎年糸満市摩文仁の丘の沖縄平和記念公園で追悼式が挙行される。住民を巻き込んだ地上戦で20万人余の人人が亡くなった。摩文仁の丘に建てられた「平和の礎」には、戦没者の氏名が刻まれている。

掲句は、その「沖縄忌」を詠んだものだが、沖縄戦に絡む直接的な事物を詠まず、一見沖縄戦とは無関係な瓜の巻きひげとの取り合わせで間接的に沖縄忌を表現した。「宙泳ぐ瓜の巻きひげ」で読者は何を想像するだろうか。瓜棚から逸れて彷徨う瓜の巻きひげに、軍用機の飛び交う空を、焼け出され放り出された沖縄の民衆を思ったりするのだろうか。或いは戦争という束縛から解放された平和な空へ伸びようとする喜びともとれようか。ひろがりのある句である。なお、「万象」の先師の三句を紹介する。

紅型に火の色沖縄戦忌かな　中山純子
沖縄忌礎に父の名祖父母の名　伊舎堂根自子
「みるくよがやゆら」と唱ふ沖縄忌　大坪景章

（柳澤宗正）

土用照り墨塗られたる多喜二の書

（「朴の青空」204）

海と街を見おろす小樽市旭展望台に、小林多喜二文学碑が建っている。本郷新の作。本を見開きにしたような珍しい形だ。幼少期に秋田から移住した多喜二は、短い生涯の23年間をこの街で暮らした。今の小樽商科大学を出て銀行に勤務。信ずる道をまっしぐらに駆け抜けたこのプロレタリア作家は、『蟹工船』『転形期の人々』『不在地主』などを遺した。

上京後地下活動に入ったが、30歳の昭和8年築地署に逮捕されて即日拷問死を遂げる。治安維持法時代の無残な最期が痛ましい。年譜によると、少年時代からの活発な投稿や、高商時代フランス語劇で高濱虚子の長男・年尾や一級下の伊藤整と共演して〝山羊〟の役をしたというのがほほ笑ましい。

掲句である。

戦時中、危険思想と見られた出版物は黒ぐろと墨で塗られた。句の作者は、作家の早すぎる死への憤りや悼みを描かない。「墨塗られたる」の七音だけを淡淡と詠み、読み手に想いを委ねている。「いかに言わないかが俳句の本質」と大坪景章先生は言われた。まさに俳句の本質の句である。「土用照り」のぎらぎらしたやりきれなさも中七を導き出す。小樽文学館の話では、復刻本は×印の伏せ字なので、黒く塗ったものは滅多にない稀覯本でしょうとのことである。

（岡本敬子）

万象作品

江見悦子・内海良太　共選

○は佳句に選ばれました。

○酒蔵の梁の古巣をそのままに　東京　一由久美子
のどけしや千鳥格子の弓袋
すだ椎の空晴れ晴れと百千鳥
鯉のひれ水を濁して入り彼岸
○初蝶に草の葉先の揺らぎかな　横浜　星野信子
春宵や指に絡るほつれ糸
囀やまづは厨の掃除から
店先に少し口開く浅蜊かな
○剪定の終りの音か暮れなづむ　佐倉　鈴木隆久
初音聞くあとしばらくは風の音
引き波に残りし泡や春愁
牡丹雪水面に消ゆるときの音
○農小屋に肝吊したる猟名残　静岡　田中秀幸
馬鈴薯植う媼日差しを背に受け
木蓮の今開かむと天へ向く
春一に歩み戻されビル谷間
木の芽張る林に猛る風の声　金沢　松田好子
日矢うくる大樹の根元すみれ草
復興の春空ブルーインパルス
○花明り濠に浮き立つ菱櫓

○足場組む三日続きの霾ぐもり　那珂川　高山ひさ子
浚渫のうなる重機や桜舞ふ
これよりは薩摩街道風光る
復元の旅籠の梁に吊し雛
春の灯を弾く玉眼不動尊　静岡　松永博子
○春寒や魚板の腹のささくれて
亀鳴くを聞くや羅漢の首傾げ
花馬酔木薬師の前にそよぎたり
春うららリップグロスを華やかに　札幌　石田睦
山間の春の日和の露天風呂
石狩湾タンカー停る春の沖
コロナ病みいつまでも咳嗽びしびし　佐々木茂
銀杏草放てるお汁春の宿
○塒立ち帰雁幾万北の沼　※銀杏草……北の海の紅藻
銀杏草北の岬に春を摘む　島崎洋
○昨日とは違ふ瀬音や水温む
飛花落花参道を行く車椅子
薄ら日を拾ひ集めて松雪草　園田鶴子
木の根明く蝦夷栗鼠何か探し物
歩道まで水の溢るる春の池
雪解水ベンチの脚を溺れさせ　札幌　竹重富子
○鳥の声森のすべての木の根明く
無造作に塁に生けたる枝芽吹く
シンバルや遅遅たる春を目覚めさせ　田邊政代
春の陽の透ける赤子の耳たぶに
友の子の遺墨しみじみ風信子
閃きて大白鳥の引きにけり　谷廣司
残雪や遠嶺のひかり空に地に
濃き淡きわが影を追ふ春スキー
○雪割や庭の蛇口にあと三尺
春日和新築ビルの大看板　土門一平
幼児のカートの散歩ふきのとう
男手に米研ぐ水のぬるみけり　土門一
いつもより子供の多い復活祭
雪解道園児の散歩はじまりぬ
北国のほほに冷たき春の雨　船橋明美
武者人形怖いと泣きし子父親に
種まきや朝の水やり手伝ふ子
対岸の家並おぼろ人おぼろ　八代洋子
ふる里の山河おぼろに夢の中

薄雲に春三日月のわたりけり　札幌　和島良一

ひびき来る峡の目覚めの遠雪崩　大江　安藤桂花

とび職の空柔かき日永かな　仙台　富田洋子

糸遊の降りしく野路の草の揺れ　新潟　榊原キヨ子

下校児の声ちりぢりに春田道　鹿沼　渡辺利子

淡雪に降られいつもの珈琲店　栃木　飯塚キミ

大杉に風のからまる余寒かな　東日本大震災十三回忌

○行方不明の三千体の雛かな　斎藤ヨシ

有耶無耶関をちこちに蕗の薹　斎藤　信

初音かな刑場跡の細き径　佐藤幸示

四つ目垣ほつれしままに梅三分　やせ猫の足早に去る余寒かな

庭石に今日もひよこひよこ雀の子　束の間に弥彦山を隠す春吹雪

錆色に落つる椿と咲く椿　車窓へと桜しべ降る名残雨　新潟　山田季聴

○金の目の猫の見上ぐる紅椿　初蝶や和ぐ風に身を委ね

天窓の鳥影速し木の芽晴　花巡り出逢ひと別れ混り合ひ

ものの芽や転居の準備間に合はぬ　学童を守るボランティア鳥雲に　燕　渡辺志ま

色秘むる蕾を抱くチューリップ　抱きとむる滑り台の子山笑ふ

ものの芽や庭で四股踏む二三回　弥彦嶺へ入る日たしかむ夕桜

朧夜や小さき明かりのラーメン店　土筆摘小さき両手ににぎりしめ　芳賀　稲川清子

神苑の芝に届かぬ春の雪　○ぴかぴかの自転車連ね新入生

廃校になりて十年老桜

露座仏の御掌滴る花菜雨　福武幸子

○ブルーシート敷く間も花の零れけり

ビル過ぎて路面電車は花菜の中

クロッカスに迎へられたり友の家

杉花粉はらひはらひて玄関に

尻餅をつきし幼や蝶の昼　栃木　飯塚キミ

かたかたと卵の茹る花の昼

静かなる沼をかこめる花万朶

山中の山吹ひとへ風ふはり

緋寒桜夫婦で守る館跡　佐野　木村君子

○堀跡に無患子拾ふ春彼岸　齋藤ミチ子

花蘇芳見上ぐる庭の華げり　仲山さよ子

川岸の小道に集ふ花見客

鯉跳ねて大きく揺るる花筏

空晴れて桜土手行く園児かな

芹青みときをり濁る野川かな

○小町の碑前も後ろも諸葛菜　蕗原美穂子

三月や仏足石の加護給ふ

朝明けの雪解靄なる富士の峰

草青む富士山麓の牛ねまる

夕映えの春富士望む露天風呂　義本美智江

高枝の丸き宿木芽吹きたり

チェーンソー響く山麓桃の花

掛軸は福の百字や木の芽和

富士の山薄むらさきに霞みをり　志木　汐見克彦

ぽつぽつとうすくれなゐやしだれ梅

杖突きて帰る家路や鳥曇　森山洋之助

槌音なき新築現場花菜雨

岡持のラーメン届く花筵

ラジコンのポルシェ疾走風光る

○盆栽の桜満開食卓に　新座　多田英治

お遍路の般若心経弥して

結願寺歩き遍路と行き合へり

花吹雪浴ぶる余生や忠霊塔　千葉　高田みや子

捌かるる面飄飄と桜鯛

○かたくりの花乃木邸の農具小屋　小林あけみ

次次と木瓜咲く塩田跡地かな　酒々井

雉の声夜風に細くなりにける

○朝風やつんと芽吹きの匂ひたる　新谷八郎

山茱萸の花鳥も来ず黄を零す　佐倉

そろりそろり磴にびつしり花の塵

鵯喜喜と満開となる花の奥　有泉正夫

凛凛しきや送辞読む声春立てり

三色のクレヨン使ひ桜画く

数独に妻の長考春うらら　杉田富美代

花めがけ頭突つ込む眼白かな

つんつんと新芽伸してクロッカス

黄のあとに紫咲けるクロッカス　鈴木美根子

○モーツァルト流るる牛舎のどけしや

闘牛士のやうに操る春ショール　村田由美子
春きざす名もなき草の光りをり　佐倉　立原千代子
春の雨防人歌碑の文字薄れ　米田敏子
さくら咲く土手のベンチの新しく　城跡へ続く坂道ふきのたう　春の月こむら返りで目ざめけり　春障子鳩の羽音の聞えくる　垣根越し風をよびたる雪柳　船橋　槐島修
遠山にふはり浮べり山桜　老齢を諾ひ独りふらここに　シクラメンうす紫の満開に
○ふらここを一人こぎをり昼下り　近藤澄子
満開の紅梅の下歩きけり　山口秀吉
伊吹山初めて合へる蓬かな　一時間二本のバスや蓬摘
手がかかると桜を嘆く媼かな　柏　鹿毛満子
うながされ一歩前出る新入生　舟着き場杭にからまる糸柳　大わらじ下る山門木の芽風
○啓蟄や石ころひとつはねのけて　柏　村田由美子
鬼ごつこ一抜け二抜け春夕焼　摩尼車ひとりで回す彼岸かな　チューリップ六弁すべて反りかへる　松戸　石川幸子
右頬にかすかな気配初蚊かな　駅前に老いたる桜散りしきる　啓蟄や大小五個の土竜塚　床の間に天晴の軸白椿　店先に春筍の太きかな　夕闇に香り満ちくる沈丁花　霞立つ城址に白き朝日かな　曇天の二畝明き花菜かな　葉の落ちし並木を包む桜かな　白梅や叔母は優雅に百六歳　花満ちて色いろいろのランドセル　薄ら日に辛夷の蕾ふくらみぬ　紫木蓮風に解るる朝の道　風さやぐ鉢いつぱいの桜草　二病息災とも思ふ柳の芽　市川　奥澤よし江
○砂の城しづかに崩す春の波

桜貝ひいふうみいの光あり　東京　安藤美酒々

エイプリルフール嘘を願へる危篤の報　大場八朗

鳥雲に急変なれど大往生　北口富栄

○手に残る別れの握手花の冷え　齊藤孝夫

子規庵の朝の静寂や春の雨　高野翠子

生サラダ春の玉葱たつぷりと　鶴田智美

北風にもまれてあまきはうれん草　中澤桃子

敷石に音なく落つる紅椿　春の夜やひとりトランプきりもなし

参道に店の軒端につばめ来る　雨やみて朝日に光る若葉かな

禅寺の風さやさやと竹の秋　金毛の長寿の猿の昼寝かな　東京　長谷川はるみ

ブルーシート花と寝転ぶカップ酒　花の下オクターブ上げ子の泣ける

堰上る鴨の羽ばたき花の池　ひとひらの白芍薬の散り残る

緑青の屋根に届けり花の影　蓬摘む里に帰れば里ことば

新社員胸の名札に手のゆきて　初つばめ万年橋のたもとかな

○玄関に少しこぼれて春の土　春の服ショーウィンドウの華ぎて

案内はふりがな付きや一年生　同窓の見上ぐる桜の色仄か

石鹸玉吹く子走る子目に追うて　シエラネバダに雪まだ名残る機窓かな

枝垂桜そのかげうつす手水鉢　○春光がマストに眩しマルセイユ

夜桜や若きに押され橋の上　穴出づる青大将に人だかり

○帰りには対岸歩む桜どき　人去りて屋根に狭庭に桜ふる

ランドセル背負ふ写真や一年生　平子甲奈

雪柳ゆらりゆらりと池の端　馬場美智子

○水馬伸びて縮んでまた伸びて　松井宣夫

振り返りまた振り返る桜かな

菜の花や風の岬の潮飛沫　松本幸男

水入らず熱きに和む蜆汁

亀鳴くや赤信号を渡る猫

ご朱印の墨かはく間を初音かな　調布　荒井　仁

諸葛菜奈良仏の膝濡れそぼち

春障子狩野の虎に日が届く

玉椿緑葉の中赤く映ゆ　三鷹　南場雅子

春の旅竹林囲ふ露天の湯

パンジーのどしや降り雨に濡れゐたり

花菜畑子らの全身黄の色に　国分寺　中ノあさ子

入学の制服の吾子見送りぬ

経唱へ寝釈迦の後に従ふ子

花吹雪七人乗りの乳母車　日野　松原悦子

春の野や紙飛行機の宙返り

○花筏大き分れに差し掛る

ランナーの細き足首梅ひらく　青梅　横井一美

春めきて桜模様の缶ビール

春疾風自転車あまたなぎ倒し

祖母の歳母の歳超え蓬摘む　横浜　大駒泰子

うららかや亀の横切る散歩径

○隣より花束にして蕗の薹

亡き犬の尾を振り来る春の夢　岡　元枝

春疾風連獅子のごと竹揺るる　島の春蛸煎餅に長き列

枯芝の青味がかれる今朝の雨　横浜　加藤和子

風下の街へ流るる花の屑

目の前の巣作り鴉枝折つて

病癒え再訪したる古都の春　坂本具子

白砂に白蝶舞へる神の庭

つるべ井に春の光や小鳥啼く

七色の嵩を巻きあげ落葉掃く　柴田雅春

大亀の首をのばして実万両

松手入れ庭師が移る池の縁

石鹸玉七色仰ぐ母と子と　長野高朋

○春立つや龍舞ひ踊る中華街

朝市や板戸に並ぶ蕗の薹

古民家の軒に揺れをり吊し雛　豊　美佐子

春の雲アンナプルナに似てゐたり

ボール箱開けて苺の香りかな

木の芽山雨ぞんぶんに洗ひをり　川崎　横山ユキ子

木の芽風皆と登れる心地して

庭先に父ある如く雪柳

流し雛姉妹の願ひ寄り添ひて　大和　中谷由郁

制服のブラウス眩し風光る　伊勢原　鷹取瑞子

○春の雨書院に籠る茶の香り　松田　古谷悠紀子

髪切つて足音軽く花の下　茅ヶ崎　久保田富士子

入院の夫に見せたき桜かな

六片に紫分けて甘菜咲く　静岡　飯田優子

桜鯛食ひ初め膳に反り返る

沢水の音のやさしさ芹をつむ

○身構へて蛙飛び越す石畳

パソコンで管理の野菜春の土

家系図に亡と記せる彼岸かな

雨しとどはくれん昨夜に色変へし

長電話せし声耳にお中日

うづくまる猫の動かぬ春の闇

草の葉に日のぬくもりや百千鳥

灯籠の脇に蒲公英一つ咲く

門前に白詰草の二つ三つ

墓山に声の重る経よみ鳥

畦道に春が来た来た登校子　伊東文恵

靴紐を結び直せり花の下

日を弾く木木の高きに初燕

蒲公英の黄の鮮やかに術後の日　静岡　海野俊彦

○春雷に翼を立てて鳴く鶏哥

追風に急上昇の初燕

麗かや五人乗せたる乳母車

蹲踞に終の一輪白椿

矢狭間を抜けて黄蝶の風に乗り

○菜の花や尊徳像は鍬を持ち

谷川の渕を照せり花木五倍子

葛布屋の暖簾を揺す春の風

顔程のバーガー食ぶる梅まつり

野菜積むコンテナ覗く春の鳥

春肥蒔く背中に重き二十キロ

園児輪となり寒梅を見上げたり

鶯のこゑ二度三度義元廟

蒟蒻と豆腐の並ぶ針供養

石庭の鬼瓦へと桜かな

○白毫を放ちてゐたり涅槃像

春筍の皮剝くほどに香りけり

石除き馬鈴薯植うる媼かな

雲流れ荒田の隅に蓮華草

入り彼岸空を眺むる老夫婦

○軽トラに獣の臭ひ猟名残　静岡　矢野喜久江

ビードロのぽつぴんぽこん春動く

春霞いつもの富士の遠きかな　金沢　田上ナツ子

青空の夫の居場所や朝桜　焼津　小梁洋子

野球部のかけ声走る花の下

○さらさらと湧き出す俳句春の夢

春昼やゆるりと回す摩尼車　掛川　鈴木美由紀

観音の足元忙し地虫出づ

糸桜駅舎の屋根に影の濃き

軽トラの窓全開に山笑ふ　川根本町　鈴木裕一

裏山の風に吹かるる植木市

三月尽閉づるシャッター錆色に

辛夷咲く空に向つて凛として　金沢　北野陽子

逢ひたくて椿咲く家見上げをり

蛤に絵を描きたり友のゐて

声あげて花を横切る鳥の列　新出祐子

色濃きも薄きもよけれ紅枝垂

春浅し窓に鳴きたる番鳥

○白山の風鳴る麓麦青む　田上ナツ子

蠟梅の香りへ人の誘はれ

陶狸の笠すべり落つ春の雪

卒業す少年の背の広くなり　金沢　田上ナツ子

嵩を増す川滔滔と遅日かな

○うぐひすや普請の済みし山の道

潟風に源平咲きの梅香る　廣田宏美

短靴の春泥まみれ拭ひ去る

雪かぶる伽羅の木垂るる池の面

やりかけの編物二つ日永かな　宮崎惠美

春野ゆく祖母の歳時記ポケットに

満開の花へ連れだち卯辰山

芽のいくつ白山吹の小さき芽　白山　朝倉みゆき

亡き人を河津桜と見送りぬ

正装の卒業生の泣き笑ふ

土佐水木きらめき星と親しみて　鶴尾正江

踏青や草をまさぐる馬の鼻

鎖されし窓辺なつかし初燕

思ひ出の水茎遺し卒業す　敦賀　川口和代

朧月球友供花に埋れけり

春風や　大谷吉継　吉継偲ぶ浦芝居

オンライン授業の子らの卒業歌　敦賀　為永香月枝
小面はうつむき加減月朧　　松山　入河　大
山笑ひ地軸ゆつくり廻るかな
匂ひたる薄紅梅や雨細く　　徳島　池田やすし
春荒やみな一斉に申告期
雨樋の吐き出す音や春の雷
サーカスのポスター揺れて春隣
文庫本ポケットに詰め青き踏む
○白木蓮妻と歩幅を合す坂
浄瑠璃の語りの聞ゆ雛館　　林　早苗
二歩三歩赤い靴の児山笑ふ
打球音空に谺し風光る
ステーキを二枚たひらげ卒業す
入り彼岸午後は静かな雨となる
阿波球児春風受くる甲子園
ふる里は菜の花盛り札所道　　山本瑤子
去年の巣の枝を残して剪定す
啓蟄や笑ひ転げる下校の子
○お手玉の豆とび出せり雛祭　小松島　田上幸子
手漕ぎ舟追ひ越して行く花筏
人は見上げ鳶は見下す桜かな
漬物と焼酎下げて花の下　福岡　園田清子
蜆汁二つの椀にたつぷりと
はなびらのくすめる桜月夜かな
さげもんの雛華ぐ城下町　　鶴田輝代
青柳の花耀へる川下り
どんこ舟ゆつたり下る春の昼
春灯の一つ灯りてまた一つ　　宮田千恵子
言ひかけてつぐむ唇桜二分
春寒し句帳いまだに一字のみ
手のひらに置く華やかな夫婦雛　宮崎　湯地栃子
下萌をうるほす雨となりにけり
野の小径辿れば繚ふ春の風
退職の朝満開の桜かな　門川　請関ゆかり
○履歴書の下書き二回春の雲
旅立ちのホームに校歌桜舞ふ
ひつそりと朝日に光る杉菜かな　国富　山口孝治
校庭の枝葉をさらふ春の風
桜湯の花の開くを待ちてをり
春泥に足取られつつ川伝ひ　ベルリン　森尾　舞
白髪また増えたる四十路ひな祭
囀を窺ふ猫の背に朝日

俳句カレンダー掲載句自註

令和6年版俳人協会『俳句カレンダー』に掲載された句と作者による自註を順次ご紹介いたします。

潮騒のただ聞こえをり昼寝覚（7月）　中村千久

平成4年の夏、勤務していた学校で顧問をしていた卓球部の合宿で、九十九里浜の大網白里海岸へ引率したときのもの。句集『薄荷飴』では3番目に掲載しているが、実はこの句が、私が作った初めての俳句だったのである。

当時の卓球部は、明治大学で卓球部に所属していたという、それは熱心な中年男性の指導を受けていたから、合宿にもこのコーチが休暇をとって参加してくれていた。そこへ卒業生などが次次とやって来るから、技術指導に顧問の出る幕はない。もっとも、温泉場のピンポン程度が関の山だった私だから、絶妙なカットサーブなどを身に付けた中学生部員を相手にしたところで、歯が立とう筈もなかった。

そんなわけだから、生徒たちが練習に励んでいる間は、宿舎の自室で自由時間を過ごすことになる。本を読んだり仕事をしたり、そして昼寝も日課の一つとなっていた。ある日のこと、午睡から覚めると、海岸の方から、単調に繰り返す波音が聞えた。どことなくけだるい夏の午後だった。

2学期になって、当時、飛高隆夫先生が「宗匠」を名乗って主宰していた職場句会に投句したのだが、なんとその時の最高点句となった。ビギナーズラックである。そんなこともあって、私にとっては思い出深い一句になっている。

第23回 俳句四季大賞
第12回 俳句四季新人賞
第11回 俳句四季特別賞
結果発表

第24回「俳句四季」全国俳句大会
結果発表

巻頭三句
長谷川櫂／岸原清行
江中真弓／鴇田智哉
柴田鏡子／佐藤　風

今月の華
蜂谷一人／名取里美

俳句と短歌の10作競詠
林　桂＋髙柳蕗子

LEGEND 私の源流～古沢太穂
日野百草

好評連載
成瀬政博 とりあえずの日々
筑紫磐井 俳壇観測
坂口昌弘 忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人 句の手触り、俳人の響き
大西　朋 俳句へのまなざし
井上泰至 俳句の詩語 イメージ辞典
神作研一 てのひらの江戸 ―古典籍を旅する
藤村公洋 俳句のつまみ
堀田季何 諸家書架
二ノ宮一雄 一望百里

俳句四季 Haiku Shiki
2024年7月号
6月20日発売
定価1100円(税込)
https://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版
〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

万象作品の佳句

内海良太

酒蔵の梁の古巣をそのままに　東京　一由久美子

雛を育て終わった巣は、大抵は打ち捨ててしまうが、また来る燕のために、巣はそのままにしてあった。清潔を第一とする酒蔵なので、この古巣は中庭ではなく酒蔵の裏庭、酒蔵の配慮に応えて燕は来るのだろうか、と思っている。

初蝶に草の葉先の揺らぎかな　横浜　星野信子

この春、初めて見る蝶はうれしいもの。思わず初蝶、初蝶と周りに知らせたくなる。草むらを初蝶が低く飛び回っている、その度に草の先が歓迎しているように揺れている。

剪定の終りの音か暮れなづむ　佐倉　鈴木隆久

植木職人が入り庭木の剪定である。午前中はバサバサ枝を切り落とし、みるみるうちに足元が枝葉で一杯になる。午後からは鋏の音で作業の進捗が分かる。樹形を見ながら仕上げに入り、日永の作業も終わりに近づいている。

農小屋に肝吊したる猟名残　静岡　田中秀幸

日本の猟期は11月15日～翌年2月15日（北海道では10月1日～翌年1月31日）。猟期の間は農小屋も猟の道具の出し入れで忙しかったが、この時期に仕留めた獣の肝が干してあったという。「熊胆」にするのだろうか。

花明り潦に浮き立つ菱櫓　金沢　松田好子

金沢の松田さんなので、この「菱櫓」は金沢城。金沢城は花の名所、兼六園も近いのでこの頃は人出も多くなる。お城に潦はつきもの、潦に映る菱櫓はこの時期一番美しい。

足場組む三日続きの霾ぐもり　那珂川　髙山ひさ子

九州の黄砂の時期、建設現場の足場を組む作業は大変なようだ。関東では洗濯物の汚れを心配する位で済みそうだが、九州の黄砂は生活全般に影響があることを知った。

春寒や魚板の腹のささくれて　静岡　松永博子

「魚板」は禅寺の軒下などに吊られている。魚の形をした木製の仏具で、これを打ち鳴らし寺内の諸事の運行を知らせる。その魚板の腹の辺りが使い古されてささくれていたというもの。春とはいえ周りの木木はまだ枯れの中にあり、寒寒とした感じが「ささくれ」に出ている。

これより三句入選よりの佳句

塒立ち帰雁幾万北の沼　札幌　佐々木茂

札幌もようやく鳥が帰る頃となった。沼を埋め尽くしていた帰雁の風景は壮観なものだろう。「幾万」に作者の感動がこもっている。

昨日とは違ふ瀬音や水温む　札幌　島崎洋

同じ札幌でも前の句に比べ静かな句。雪解けで日ごとに川の水量が増える様子が窺える。大自然の懐にある札幌　春の喜びを微妙な自然の変化で表した句。

鳥の声森のすべての木の根明く　札幌　竹重冨子

「木の根明く」（「開く」とも）。この季語に雪国の作者らしい実感がある。ようやく森全体も雪解けが完了したようだ。森林に響く鳥の声が森を一層春らしくしている。

ぴかぴかの自転車連ね新入生　芳賀　稲川清子

中学生になって学校が遠くなり、自転車通学の生徒が多くなってきた。ぴかぴかの自転車は新しく買ってもらったもの。初初しい自転車の一団が稲川さんの家の前を通過する。事故の無いように祈らずにはいられない。

小町の碑前も後ろも諸葛菜　佐野　仲山さよ子

小野小町の伝説は全国に存在する。栃木県佐野の仲山さんなのでこの碑は下野國分寺近くの伝小野小町の墓かも知れない。折からの色鮮やかな諸葛菜、小野小町に相応しい。

モーツァルト流るる牛舎のどけしや　佐倉　鈴木美根子

牛舎にクラシック音楽を流すと牛の乳の出がよくなると聞く。この牛舎ではモーツァルト。他の牛舎ではどんなクラシックの曲を流しているのだろう。音楽は牛のストレス解消に役立っているらしい。

啓蟄や石ころひとつはねのけて　柏　村田由美子

「啓蟄」3月6日頃に当たる。身近な人気のある季語である。石ころをはねのけたのは村田さん。土中に潜み隠れていた虫が穴から出やすいように手を貸したのである。対象の虫と一体となっているところが面白く、この俳諧味が楽しい。

帰りには対岸歩む桜どき　東京　中澤桃子

どこの川辺を歩いているかは読者の想像に任せればいい。隅田川の浅草寺側からの対岸は向島の墨堤と見た。両岸とも花どきは人出が多く、浮世絵になるくらい美しい。何よりも花行脚の中澤さんのお元気なのがいい。

春光がマストに眩しマルセイユ　東京　平子甲奈

マルセイユはフランス南東部の地中海に臨む古い貿易港。鉄道のマルセイユ駅からも海に近い。港には地中海クルーズのヨットが多く、ヨットハーバーにはマストが林立している。春先のマルセイユは限りなく明るい。

花筏大き分れに差し掛る　日野　松原悦子

川一面の花びらが「花筏」となりゆっくり流れている。間もなく川の分岐があり、花筏はこの分岐でどうなるだろうと心配になる。松原さんと一緒に心配したくなる。

隣より花束にして蕗の薹　横浜　大駒泰子

お隣から「蕗の薹」をブーケにして頂いた。蕗の薹の花束とはと意外性を感じたし、新鮮さを感じた。お隣は気の利いた洒落た方なのだろう。物そのものから新しみを感じる句。

春立つや龍舞ひ踊る中華街　横浜　長野高朋

春節祭の横浜中華街、この時期は町全体がカラフルで賑やかになる。あの長い長い龍を大勢が棒で操って街を練り歩く。「春立つ」の季語が適切。

菜の花や尊徳像は鍬を持ち　静岡　髙橋一夫

薪を背負って本を読みながら歩く二宮金次郎像は昔から馴染がある。鍬を持つ尊徳像は作者にとっては珍しかったのだろう。金次郎が関東地方で農業指導をした話は多くある。髙橋さんにとっては新しい尊徳像の発見であった。

新中央句会報（4月例会）

令和6年4月28日（日）東京文化会館
（出席28名）

江見　悦子　主宰選

訃報続くたちまち春の星うるみ　内海良太
御朱印の滲む卯の花腐しかな　内田郁代
スニーカーの跡を古草押し上ぐる　沢辺たけし
山笑ふ起点終点駅三つ　田中道江
中華街春風赤く通りけり　内海良太
煙草好きの師の句に会へり三鬼の忌　内田郁代
スカジャンのどぶ板通り夏近し　桔梗　純
草木に新たなる色春しぐれ　奥　太雅
花は葉に書棚に古き時刻表　星野信子
夕近し影の明るき柿若葉　吉中愛子
削りきし歯のかみ合はぬ花の冷え　榎本文代
花終へて墓地はいつもの淋しさに　桑原優美子
㊖アンティークの地球儀まはす蝶の昼　一由久美子

古びて色の褪せた、しかし台座には彫刻の施されたがっしりとした地球儀なのだろう。季語は「蝶」の傍題の「蝶の昼」。蝶のとびかうまぶしいような春の昼、と書かれている歳時記もあるが、感覚的なものを秘めているように思う。掲句は、けだるい趣と共に、非生命体と生命体、暗と明、時の経過と現在、硬と軟等、対立した取合せで成功した

夕近し影の明るき柿若葉　吉中愛子

今の時期の柿若葉の、透けるような若緑の瑞瑞しさと言ったらどうだろう。夕方近くになっても、重なり合った若葉に差し合う影は明るい、と捉えた作者。写生の目が生きた若若しい句となった。

削りきし歯のかみ合はぬ花の冷え　榎本文代

誰にも覚えのある経験。歯医者の椅子で歯を削られた苦痛に堪え、ようやく歯の痛みは治まったが、どうも嚙み合せが上手く行かず憂鬱な作者。雅やかな季語「花の冷え」を取合せることで、日常を離れた世界を生んだ。

内海　良太　名誉主宰選

角瓶の琥珀減りゆく春の暮　大久保　進
スニーカーの跡を古草押し上ぐる　沢辺たけし
バサバサと白鳥帰る太き首　村田由美子
悪縁切の土器砕き冴返る　沢辺たけし
上野までゆらゆらと春惜みつつ　三屋英俊
時鳥一声ありて連休来　桔梗　純
白絹に秘仏包(くる)みて出開帳　中村千久

母衣破れ熊谷草の揺れにぶる　吉中愛子
山吹や道灌ゆかりの蕎麦旨し　南雲秀子
たんぽぽの絮一息で吹き飛ばす　三木豊子
耳たぶの欠けし仏頭花の冷え　中村千久
熊蜂のホバリングする黒き尻　村田由美子
㊕木の根開く白神山の撫水の音　加賀葉子

㊕木の根開く白神山の撫水の音　加賀葉子

雪解けが始まると、林では木の根元から同心円状に地が見え始める。これが「木の根開く」（「明く」とも）で、春が来たという実感がある。

白神山地は青森・秋田県境を東西に延びる白神岳を中心とする山地、ブナの原生林が有名。撫の木に耳を当てるとゴーゴーという水を吸う音が聞こえる。

白絹に秘仏包みて出開帳　中村千久

秘仏を他の地に移し、そこで拝観させるのを出開帳という。関東では成田山新勝寺の秘仏の、東京・深川不動尊での出開帳が有名。句は「白絹」が焦点で即物的。秘仏の移動なので取り扱いが大変。秘仏は白絹に包まれて恭しく運ばれる。博物館で開かれた秘仏展、この時も白絹に包まれて運ばれる。

時鳥一声ありて連休来　桔梗純

ほととぎすは古くから詩歌に詠われる季節を代表する鳥。昔は時期になると山から下りてくると思われていたが、実は渡り鳥で、日本にはマレーシアから渡って来ると、野鳥の研究家、故岩﨑武士さん（静岡・同人）が教えてくれた。関東地方には5月の中旬ごろに飛来する。

中村千久選

和菓子屋の路地擦るやうにつばくらめ　長谷川信也
短針の遅日を刻む古時計　大久保進
十字路を風切つてゆく初燕　砂地宏子
山笑ふ起点終点駅三つ　田中道江
廃屋の庭をタンポポ占領す　砂地宏子
関空に降り立つ機影遠霞　小池清晴
スカジャンのどぶ板通り夏近し　桔梗純
惜春や女一人の映画館　桑原優美子
アンティークの地球儀まはす蝶の昼　一由久美子
花は葉に書棚に古き時刻表　星野信子
石走る垂水や稚きまむし草　江見悦子
花終へて墓地はいつもの寂しさに　桑原優美子
㊕庭下駄に鼻緒のゆるみ朧月　榎本文代

㊕庭下駄に鼻緒のゆるみ朧月　榎本文代

自宅の庭に出て、春の夜空に「朧月」を眺めている作者。掃き古した「庭下駄」は恐らくごくありきたりのものだろうが、その黒く太めの鼻緒がいつか弛んでいることに気づいた

のだ。この「ゆるみ」という措辞がぼんやりとした朧月に妙に合っている。

短針の遅日を刻む古時計　大久保　進

夏が近づいて日没の時刻が遅くなり、どことなく一日が長くなったことを感じる頃だ。なかなか日が暮れない、そんな気分を古時計の「短針」の遅遅たる動きに託した一句。微妙な感覚である。

惜春や女一人の映画館　桑原優美子

春も終わろうとするころ、ふと思いたって「映画館」に脚を運んだ作者。「女一人の」は、もちろん観客が女一人きりというのではない。「惜春の孤独」、そんな気配が漂う。どんな映画だったのかが気になる。

榎本　文代　選

角瓶の琥珀減りゆく春の暮　大久保　進
御朱印の滲む卯の花腐しかな　内田郁代
杖置いて若葉の風を胸深く　三木豊子
十字路を風切つてゆく初燕　砂地宏子
山笑ふ起点終点駅三つ　田中道江
背の子のかすかな寝息花菜風　桑原優美子
対岸は上総の国や船おぼろ　島野ひさ
水底に水馬の影踊りけり　松浦陵保
葉桜や茶室を包む水の音　下嶽孝一
ゆく春の風に三笠の軍艦旗　島野ひさ
かざす手に房の重みや藤の雨　一由久美子
㊖花は葉に書棚に古き時刻表　星野信子

㊖花は葉に書棚に古き時刻表　星野信子

本棚の隅に見つけた時刻表。色褪せたページをめくってみると、旅の一齣一齣が懐かしく思い出される。いつの間にか桜の花は時を過ぎ葉となった。「花は葉に」、季語の持つ余情が句に寄り添っている。

水底に水馬の影踊りけり　松浦陵保

浅い流れを水馬が軽やかに走り廻っている。水底に刺し込む日の日の光がきらきらと揺れている。水馬の影はゆらゆらと踊っているよう。

山笑ふ起点終点駅三つ　田中道江

「山笑ふ」は春の山を擬人化した季語。木木が潤みを帯び、やわらかな春の日に照らされた山山は明るい。そして中七から下五への十二音がリズミカルで面白みを出している。駅三つのローカル線に乗ってみたくなる。

今後の新中央句会の予定

▽7月28日（日）東京文化会館　中会議室　13時より
▽8月25日（日）文京区・男女平等センター　13時より

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2024年7月号

特集 潜在意識と俳句
○潜在意識（無意識）とは何か
河合俊雄（心理学者・京都大学名誉教授）
○潜在意識から出来た俳句
浦川聡子　木暮陶句郎　照井翠
津川絵理子　中岡毅雄　今瀬一博
鴇田智哉　大西朋　小田島渚

〈グラビア〉俳句界NOW 谷口智行

特集 師へ送る手紙
○俳人はなぜ師を尊ぶのか 青木亮人
○師への手紙
江中真弓　横澤放川
田島和生　井上弘美　上野一孝
長島衣伊子　田中亜美　川越歌澄

●山本健吉評論賞受賞者の新作評論！
池田瑠那「ひらかれる異界、ふたりの我 ――上野泰が詠む鏡面――」

【注目の句集】暮目良雨『ここから』

★セレクション結社「あかり」名取里美

私の一冊 暮目良雨「春耕」

「俳句界」投稿欄 一流選者11名！ 日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社文學の森
お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

俳句

巻頭作品50句 宇多喜代子
作品21句 奥坂まや・中原道夫

大特集
俳句を世界に発信する醍醐味
▼総論 俳句はなぜ世界中で愛されるのか…岩岡中正
▼各論 海外での実際の活動／俳句を海外へ発信するには
▼座談会 グローカルな俳句の本質
……井上泰至×岸本葉子×堀田季何

句集特集 古賀しぐれ句集『湖の辺にして』

特別寄稿 中村苑子について……川名大

第58回 蛇笏賞受賞 第一作……小澤實

※内容は変更になる場合があります。

7月号予告
6月25日発売
予価1,100円(本体1,000円)⑩

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」（https://bookwalker.jp/）など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA https://www.kadokawa.co.jp/

北から南から

俳句鑑賞時の五感活用

東京　安藤美酒々

前回東京からの発信では、和気藹藹とした小松川句会の活動を小池清晴さんが紹介されました。さて今回は……

私は、「日航俳句会」（日本航空に現在或いはかつて勤務した会員で構成され、職種や所属結社を越えた俳句会。今年70周年を迎える）に所属し、成田・羽田・大阪で毎月開催される句会のひとつである「羽田句会」に参加すると共に、句会報「せいは」の選句・投句の受付を担当しています。

「万象」では、昨秋から新中央句会に参加して、集中の熱量高き真剣勝負の空気を体感し、いつも新鮮な刺激を受けています。新中央句会報は「万象」誌に毎月掲載されますので、今回は句会紹介から趣を変えて、俳句鑑賞時の五感活用について、日頃感じていることを述べさせて頂きます。

視覚

句会で作者の書かれた短冊が手元に届いた時、その文字から作者はどんな感情でどのような状況下でこれを記したかを受け止めていますか？　弱い筆圧だったら体調が悪いなとか、乱暴な印象だったら何かに怒っているな、といった具合です。それを受取った上で、文字の巧拙の問題ではなく丁寧に正確に清記したいものです。読み易くしっかりきちんと清記されると、それだけでその句は活き活きします。

文字と言えば、特筆すべきは「良太文字」。内海良太名誉主宰の太いペンで記される「良太文字」は、絶妙なバランスで素朴な美しさがあり、外連味の全くない俳句そのものを感じさせます。改めて、文字はその人柄の分身だと思います。

聴覚

歌会始で和歌が召人によって朗詠されるのはお馴染ですが、実は俳句も吟じることができるのをご存知でしょうか？

詩吟では律詩や漢詩だけでなく和歌も独特の音階や節をつけて吟じます。俳句はまだ余り知られていませんが、丹田から大きな声で二度繰返し朗朗と吟じられます。誌面では詳しくお伝えできませんが、やはりスケールの大きい句が相応しく、私の愛誦句は〈荒海や佐渡によこたふ天河〉です。

日本語はあまり開口せずに発音できますが、やはり大きく口を開き単語の二音目を意識すると明瞭に伝わるので、是非披講時にお試し下さい。

嗅覚・味覚・触覚

集中を高めるには香を活用したり、作句時だけでなく鑑賞時も季節の食べ物を食し、お酒を愉しみ酒器や食器を愛で、句帳や短冊、筆記用具を吟味する等等、五感をフル活用して俳句のある暮しを続け、深く味わえるようになりたいと思います。いつか自作の句を大きな声で吟じてみたいものです。

ルビーの小函　(7月号)

「同人作品」「万象作品」に掲載された漢字表記でルビを振らなかったもののうちから、読みにてこずりそうなものを拾ってあります。作品鑑賞の参考にしてください。太字は季語ですから歳時記で確かめてください。読みは現代仮名遣いにしてあります。

(編集部・校正担当)

6　**十二単(じゅうにひとえ)**
8　母衣(ほろ)
11　**嫩草(わかくさ)**
12　告天子(こくてんし)
　　鋸の音(のこのね)
13　縹色(はなだいろ)
　　裾濃(すそご)
　　家鴨(あひる)
　　如雨露(じょうろ)
14　**花樒(はなしきみ)**
　　貝母(ばいも)
　　浅沓(あさぐつ)
15　霽れ(はれ)
　　鸛(こう)
　　地魚(ぢざかな)
　　画眉鳥(がびちょう)
　　小綬鶏(こじゅけい)
　　誘へり(いざなえり)
18　掌(て)
　　解るる(ほぐるる)
19　**紫雲英田(げんげだ)**
20　延石(のべいし)
　　郁子の花(むべのはな)
　　木香薔薇(もっこうばら)
21　涼(にわたずみ)
　　直会(なおらい)
　　磴(とう)
　　祝げり(ほげり)
　　曩(やや)
22　艫綱(ともづな)
23　水脈(みお)
24　髭題目(ひげだいもく)
　　階(きざはし)
　　廿日会祭(はつかえさい)
25　鰭(ひび)
26　枝折戸(しおりど)
　　滾つ(たぎつ)
　　喃語(なんご)
27　揺せり(ゆるがせり)
　　靄(つちふる)
28　**鳥交る(とりさかる)**
29　間(あわい)
　　浅葱斑(あさぎまだら)
　　産土(うぶすな)
46　塒(ねぐら)
　　風信子(ヒヤシンス)
47　有耶無耶関(うやむやのせき)＊歌枕
　　守る(もる)
48　**無患子(むくろじ)**
　　花蘇芳(はなずおう)
49　防人(さきもり)
　　諾ひ(うべない)
　　摩尼車(まにぐるま)
50　**水馬(あめんぼう)**
52　鸚哥(いんこ)
　　蹲踞(つくばい)
　　花木五倍子(はなきぶし)
54　耀へる(ががよえる)
58　**卵の花腐し(うのはなくだし)**
　　土器(かわらけ)
59　石走る(いわばしる)
　　垂水(たるみ)

東西南北

消息等

内海良太名誉主宰、江見悦子主宰の句「くぢら」5月号に

沼べりの藻が動き出し寒明くる　良太
終刊と告ぐる巻末月冴ゆる　悦子

「初蝶」5月号に

括られて小草へ傾ぐ水仙花　悦子

「森」5月号に

底冷えの能登へ電話のつながらず　悦子

「ひいらぎ」5月号「現代俳句の鑑賞」に岸本隆雄氏が江見悦子主宰の句を鑑賞

のんどりと津軽のなまり雛飾る

（「俳壇」2024・3月号「春の季語」より）

津軽のなまり言葉は難解で津軽地方以外の人はほとんど理解できない。しかし、どこか暖かい感じのする言葉で、判らなくても大らかな雰囲気が伝わってくるのが不思議だ。「のんどり」という表現もこの句で初めて知った。古語辞典を調べたら、のどかな様子のことと出ていた。言葉に頼り切らず、心と言葉をひとつにして、今一番詠いたいことを、自分の言葉で表現するといい句が出来る。

「郭公」5月号「俳壇の今」に山崎満世氏が成瀬真紀子さんの句を鑑賞

白鳥引く朝日は空を押しひろげ

（特集・師弟で詠む春の季語より）白鳥は引く時、数家族が集まって、朝日の出る前が多いという。意外と引くとき拡げた翼は大きい。刻々と茜に染まってゆく空で高度を増してゆく群れ。「朝日は空を押しひろげ」に大自然の雄大さの夜明けの移りゆく光景を写生の確かな目で捉えている。

令和6年度春季福井県総合俳句大会・第31回金ケ崎宮花換祭俳句大会（4月7日開催）

兼題の部

佳作賞・特選　村田浩選

花換へて新幹線を待つ駅舎　川口和代
特選　原田自然選
紙漉や槽を自在に仕事唄　倉谷紫龍
特選　倉谷ます美選
寒晴やカラカラ回る缶おどし　霜田勝子

席題の部

福井県文化協議会長賞

地震の地の再興祈り花換える　川口和代

敦賀俳句作家協会長賞

一湾を眺むる桜海に散る　中村秀一

福井新聞社賞

老い桜欧亜列車に思ひ馳せ　中村　優

佳作賞

神代より恋のまほろや花換ふる　為永香月枝

主宰の第二句集『砂時計』、第十六回「文學の森賞」入賞を受賞

俳句総合誌「俳句界」を発行している㈱文學の森から刊行された、すべての書籍を対象とした賞。今回は、2022年4月から2023年3月刊行までの書籍の中から、大賞1、準大賞1、入賞14が選定された。選考委員の推薦理由として、「徹底した観察と具象の写生による、たしかな実感の中に新しみのある俳句が魅力」とある。

遠雷や岩屋に千の摩崖仏
花の雲男の背を見失ふ

小松川吟行句会、江戸川区行船公園内「源心庵」にて開催（4月7日）当日は晴れ、桜満開、出席11名

公園の花は爛漫人包む　大場八朗
公園は大きな楽器春の鳥　蕪木静子
堰上る鴨の羽ばたき花の池　齋藤孝夫
名園の入口狭し竹の秋　柴田雅春
金毛の長寿の猿の昼寝かな　長谷川はるみ
人去りて屋根に狭庭に桜降る　前川　昇
水馬伸びて縮んでまた伸びて　松井宣夫
青空を恋ふる吟行花霞　宮崎正義
遅れたる花咲きそろふ日曜日　山森明子

（報・編集部）

（←この線より切り取ってください）

万象作品

令和六年

十一月号

（八月十五日締切）

都または市・町・村名	
姓　号	ふりがな
	年齢

（句の表記は歴史的かなづかいで）（＊の枠内には何も書かないでください）

＊

＊

＊

＊

＊

939-0364

84円切手を貼ってください

射水市南太閤山13－24

万象作品投句係 行

〈通信欄〉

（←この線より切り取ってください）

第二十三回「万象」全国俳句大会作品 投句用紙

・投句は一人4句以内
・八月十五日(木)必着

都または市・町・村名	ふりがな
姓　号	
	年齢

（句の表記は歴史的かなづかいで）（＊の枠内には何も書かないでください）

＊	＊	＊	＊

84円切手を貼ってください

2700138

流山市おおたかの森東4-99-34

沢辺 たけし 様

住所	（〒　　－　　）
氏名	
電話番号	

編集後記

▽校正作業中に、辞書に当たっても分からない難しい表現や難読漢字にぶつかることがあります。ルビを振ったり、「ルビーの小函」に入れたりして凌いでいますが、一読して胸に落ちてくる作品が望ましいと思います。今年2月21日の「天声人語」に綾子の句が紹介されました。

　路の薹見つけし今日はこれでよし

難しいものは一つもありません。自戒もこめてということです。（千久）

▽昨年度末の2つの俳誌の廃刊を受けて、多くの方が「万象」に入会されました。これらの方方の作品が今月号から誌上に発表されています。今後の「万象」の大きな力になって頂けると期待しています。

　裏表紙に今秋の全国俳句大会・同人会総会のご案内を掲載しました。昨年と同じ会場です。皆様のお申込みをお待ちしております。（規子）

▽五月の連休も毎日が日曜日の私には縁のないこと。テレビは、空港や新幹線や観光地の混雑ぶりを伝えていた。日に日に雪の薄れていく富士を見、茶畑の緑を見ながら夕方歩くのが日課。昨年の夏向日葵畑だった所に、今年も向日葵の種が蒔かれたようで楽しみだ。（美穂子）

▽7月は、小学生の私にとって不思議で楽しい月だった。夏休みが始まるだけでなく、夜、神社の縁日の他に、子どもだけで提灯を持って町内を回るお盆の行事があったからだ。死者の魂を迎え送る。多くの方方とお別れして時を重ねてきた私には、様様な思いを抱かせる思い出である。（宏子）

▽島根から帰ってきた。旅先で作った句を新幹線の車内で推敲していた時に気がついたことがある。「松江」はまさしく「松」と「江」の街である。松江城の内濠に沿って「松」が植わり、「松」にまつわる季語がぴったりの場所。そして、松江の街には堀川が入り込み、宍道湖と通じている。写真で見る「松江」と目で見る「松江」には大きな違いがある。（清晴）

会員を募ります

会員は左記の会費（誌代）を前納していただきます。

一年分　一二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。

郵便振替口座　00230・0・103581

万象俳句会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡願います。

〒284－0015　四街道市千代田1－7－10

塗木翠雲

万象　七月号

第二十三巻　第四号

通巻　第二六八号

令和六年七月一日　発行

主宰　江見悦子

発行人　江見悦子

編集人　中村千久

〒168－0072

東京都杉並区高井戸東一－三一－六－603

万象発行所

☎〇三－六三二四－五七九六

印刷・株式会社ダイワクリエイト（☎03-3267-2125）

令和6年度「万象」全国俳句大会・「万象」同人会総会　案内

開催日　令和6年10月28日（月）
午前11時（午前10時30分より受付開始）～　午後4時終了予定

会場　ホテルグランドヒル市ヶ谷（東京都新宿区市谷本村町4－1）☎03－3268－0117
【交通】JR中央線・総武線、都営地下鉄新宿線、東京メトロ有楽町線「市ヶ谷駅」より徒歩3分

同人会総会　総会・中山純子記念俳句賞表彰　他

俳句大会　◆表彰　万象俳句賞
万象新人賞
◆披露　新同人・他結社からの転入同人・会員
大会入選作品（特選句に選者染筆贈呈）

会費　一万三千円（昼食代を含む）

申込み　**8月20日（火）まで**に会費を左記へお振込み願います。会費納入をもって参加申込みとします。
・ゆうちょ銀行より振込　ゆうちょ銀行〈記号〉10910〈番号〉07493091（通常貯金）
・他の金融機関より振込　ゆうちょ銀行〈店名〉098〈口座番号〉0749309（普通預金）
口座名義　大久保　進　☎044－333－1054
※当日・前日の当ホテルでの宿泊の斡旋はいたしませんので、各自ご手配ください。

大会作品募集

作品　一人4句まで（1～3句でも投句可）
「万象」誌（7月号）巻末綴じ込みの投句用紙をご使用ください。

投句料　無料　**＊締切　8月15日（木）**

投句先　〒270－0138　流山市おおたかの森東4－99－34　沢辺たけし　☎090－7637－5661
令和6年度「万象」全国俳句大会実行委員会　大会委員長　江見悦子
実行委員長　中村千久